

財団法人国際高等研究所

2006 年度（平成 18 年度）

事 業 報 告 書

－ 2006 年 4 月～2007 年 3 月 －

I. 管理運営	
1. 理事会、評議員会	— 1—
2. 資産運用委員会	— 4—
3. 企画委員会	— 4—
4. 財務状況	— 6—
II. 研究事業	
1. 総括	— 7—
2. 研究プロジェクト	— 8—
3. 特別研究	—16—
4. 覚書に基づく共同研究・研究協力等	—18—
5. フォローアップ研究	—18—
6. 学術フォーラム	—18—
7. 国際フォーラム	—18—
III. 「学者村」の活性化	
1. 「フェロー (IIAS Fellow)」事業	—19—
2. 「招へい研究者 (IIAS Researcher)」の委嘱	—19—
IV. 専門的人材育成事業	
1. コンピューテーショナル・マテリアルズ・デザイン (CMD) ワークショップ	—19—
2. 特別研究員の採用	—19—
V. 学術情報事業	
1. 情報出版事業の充実	—20—
2. 研究成果報告書の発行	—20—
3. 選書の発行	—20—
VI. 一般公開事業	
1. 公開講演会	—21—
2. 高等研「雅松庵」茶会等	—21—
VII. 広報事業	
1. 「IIAS NEWSLETTER」等の発行	—22—
2. ホームページの更新	—22—

I. 管理運営

1. 理事会、評議員会

理事会、評議員会及び資産運用委員会の開催状況は下記のとおり。

第 58 回理事会・第 52 回評議員会（2006 年 6 月 29 日）

議案第 1 号	2005 年度(平成 17 年度)事業報告及び収支決算(案)の承認について	
	【理事会】	【評議員会】
議案第 2 号	評議員の選任について	理事・監事の選任について
報告	資産運用について	

第 59 回理事会・第 53 回評議員会（2007 年 3 月 13 日）

議案第 1 号	2007 年度(平成 19 年度)事業計画(案)について	
議案第 2 号	2007 年度(平成 19 年度)収支予算(案)について	
	【理事会】	【評議員会】
議案第 3 号	評議員の選任について	理事の選任について
議案第 4 号	所長人事について	
報告	資産運用について	

財団法人国際高等研究所 役員名簿

2007年3月31日（五十音順・敬称略）

	氏名	所属機関・役職
理事長	立石 義雄	オムロン（株）代表取締役会長
副理事長	下妻 博	（社）関西経済連合会副会長
	西室 泰三	（社）日本経済団体連合会評議員会副議長
	矢嶋 英敏	（社）京都工業会会長、（株）島津製作所会長
専務理事	野村 一雄	オムロン（株）顧問
理事	石川 博志	関西電力（株）相談役
	尾池 和夫	京都大学総長
	大崎 仁	人間文化研究機構理事
	太田 房江	大阪府知事
	大宮 久	京都経営者協会会長
	柿本 善也	奈良県知事
	金森 順次郎	（財）国際高等研究所長
	茅 陽一	（財）地球環境産業技術研究機構研究所長
	小宮山 宏	東京大学総長
	田代 和	近畿日本鉄道（株）相談役
	辻井 昭雄	関西経営者協会会長
	西口 廣宗	奈良商工会議所会頭
	西口 泰夫	京セラ（株）取締役相談役
	野村 明雄	大阪商工会議所会頭
	松下 正幸	松下電器産業（株）副会長
	宮原 秀夫	大阪大学総長
	村田 純一	京都商工会議所会頭
	森重 和子	（財）国際高等研究所事務局長
	森下 俊三	（社）関西経済同友会代表幹事
	安田 國雄	奈良先端科学技術大学院大学長
	山田 啓二	京都府知事
	渡部 隆夫	（社）京都経済同友会代表幹事
監事	奥 正之	（社）大阪銀行協会会長
	柏原 康夫	（社）京都銀行協会会長
	吉川 郁夫	監査法人トーマツ代表社員
理事	27名（理事長1、副理事長3、専務理事1、理事22）	
監事	3名	

財団法人国際高等研究所 評議員名簿

2007年3月31日 (五十音順・敬称略)

氏名	所属機関・役職
安西祐一郎	(学) 慶應義塾長
井植敏雅	三洋電機(株) 社長
石井米雄	人間文化研究機構長
石田明	大日本スクリーン製造(株) 会長
位高光司	日新電機(株) 社長
犬伏泰夫	(株) 神戸製鋼所社長
井上礼之	ダイキン工業(株) 取締役会長兼 CEO
宇野郁夫	日本生命保険(相) 会長
江島義道	京都工芸繊維大学長
大林剛郎	(株) 大林組会長
大谷 實	(学) 同志社総長
岡田登史彦	ムーンバット(株) 取締役相談役
岡田益吉	(財) 国際高等研究所副所長
片倉もとこ	人間文化研究機構国際日本文化研究センター所長
金児暁嗣	大阪市立大学長
河井規子	木津町長
河田悌一	関西大学長
北川善太郎	(財) 国際高等研究所副所長
久米健次	奈良女子大学長
倉内憲孝	住友電気工業(株) 顧問
佐藤禎一	日本国政府ユネスコ代表部特命全権大使
柴田 稔	東洋紡績(株) 相談役
志村令郎	自然科学研究機構長
千玄室	茶道裏千家前家元
竹中統一	(株) 竹中工務店社長
竹葉 剛	京都府立大学長
玉越良介	(株) 三菱東京UFJ銀行副会長
塚本能交	(株) ワコールホールディングス社長
鳥井信吾	サントリー(株) 副社長
中川久定	(財) 国際高等研究所副所長
長田豊臣	(学) 立命館総長
中村満義	鹿島建設(株) 社長
野上智行	神戸大学長
幡掛大輔	(株) クボタ社長
初山一登	日本新薬(株) 社長
平松一夫	関西学院大学長
松園万亀雄	人間文化研究機構国立民族学博物館館長
水越浩士	神戸商工会議所会頭
南 努	大阪府立大学長
村上仁志	住友信託銀行(株) 特別顧問
山岸久一	京都府立医科大学長
吉野泰生	住友生命保険(相) 会長

(評議員42名)

2. 資産運用委員会

第19回資産運用委員会（2007年3月13日）

基本財産「コミュニアルバンク30年仕組債」（額面1億円）早期償還の再運用について諮り、「平成18年度第1回北九州市公債」を購入

第20回資産運用委員会（2007年3月28日）

運用財産「ノルウェー輸出入金融公庫20年仕組債」（額面1億円）早期償還の再運用について諮り、「第300回大阪府公債」を購入

3. 企画委員会

企画委員会は、研究事業の提案や評価など事業活動の推進を図るための所長の諮問機関であり、本年度は下記のとおり3回の委員会を開催した。委員会では、研究プロジェクト等の実施状況や本研究所の研究活動の在り方等について検討を行った。2006年度の構成員は、企画委員に加え、上級研究員、特別委員（研究プロジェクトの研究代表者）及びフェローの計41名（別掲Ⅲ.1参照）であり、下記のとおり。

第1回： 6月16日～17日

2005年度研究事業の実績報告、2006年度研究事業の概要説明、所長・企画委員による研究活動の事例発表

第2回： 10月20日～21日

2006年度研究事業の実施状況報告、2007年度研究事業計画案の検討、企画委員による研究活動の事例発表

第3回： 2月16日～17日

2006年度研究事業の実施状況報告、2007年度研究事業計画案の検討、上級研究員・企画委員による研究活動の事例発表

①2006年度企画委員（20名）（任期2005年4月1日～2007年3月31日）

石井米雄	人間文化研究機構長（タイ・東南アジア研究）
位田隆一	京都大学大学院公共政策連携研究部教授（国際法）
亀本洋	京都大学大学院法学研究科教授（法哲学）
近藤寿人	大阪大学大学院生命機能研究科教授（発生生物学）
齋藤恭司	京都大学数理解析研究所教授（複素解析学）
佐藤矩行	京都大学大学院理学研究科教授（発生生物学）
佐々木正子	京都嵯峨芸術大学教授（日本美術史・画法解析）
杉山正明	京都大学大学院文学研究科教授（東洋史学）
田口紀子	京都大学大学院文学研究科教授（欧米語学・欧米文学）
田中克己	京都大学大学院情報学研究科教授（社会情報学）
津田一郎	北海道大学電子科学研究所教授（数理科学）
福山秀敏	東京理科大学理学部教授（物性物理学）
星元紀	東京工業大学名誉教授（発生・生殖生物学）
マルコム・スミス	中央大学法科大学院法務研究科教授（日本法）2006年6月22日逝去
季衛東	神戸大学大学院法学研究科教授（中国法・法社会学）2006年9月1日委嘱
森川弘道	広島大学大学院理学研究科教授（生命理学）
ロバート・キャンベル	東京大学大学院総合文化研究科助教授（日本文学）

金 森 順次郎 国際高等研究所長 (物性物理学)
岡 田 益 吉 国際高等研究所副所長 (発生生物学)
北 川 善太郎 国際高等研究所副所長 (民法学)
中 川 久 定 国際高等研究所副所長 (フランス文学史・思想史)

②2006年度上級研究員 (2名)

新 庄 輝 也 京都大学名誉教授 (固体物理・無機素材化学)
志 水 隆 一 大阪工業大学情報学部教授・大阪大学名誉教授 (応用物理学)

③2006年度特別委員 (9名)

石 川 文 康 東北学院大学教養学部教授 (哲学)
研究プロジェクト「多元的世界観の共存とその条件」
木 下 富 雄 京都大学名誉教授 (社会心理学・リスク科学)
研究プロジェクト「21世紀の宇宙開発・宇宙環境利用の問題」
榎 木 哲 夫 京都大学大学院工学研究科教授 (システム工学)
研究プロジェクト「スキルと組織」
沢 田 康 次 東北大学名誉教授・東北工業大学教授・高等研フェロー (情報物理学)
研究プロジェクト「認識と運動における主体性の数理脳科学」
鳥 海 光 弘 東京大学大学院新領域創成科学研究科教授 (複雑性科学)
研究プロジェクト「隙間-自然、人間、社会の現象学-」
仁 科 一 彦 大阪大学理事・副学長・大学院経済学研究科教授 (ファイナンス)
研究プロジェクト「グローバリゼーションと市民社会」
原 田 宏 筑波大学名誉教授 (植物生理学)
研究プロジェクト「分化全能性-普遍性と特異性-」
村 松 岐 夫 京都大学名誉教授・学習院大学法学部教授 (行政学)
研究プロジェクト「コア・エグゼクティブと幹部公務員制度の研究」
吉 田 忠 東北大学名誉教授・高等研フェロー (科学史)
研究プロジェクト「19世紀東アジアにおける国際秩序思想の形成」

④2006年度フェロー (12名)

2005年度からの継続 (5名)

木 下 富 雄 京都大学名誉教授 (社会心理学・リスク科学)
黒 田 成 幸 カリフォルニア大学サンディエゴ校名誉教授 (言語学)
小 林 俊 一 秋田県立大学長／東京大学名誉教授 (固体物理学・物性物理学)
志 水 隆 一 大阪工業大学情報学部教授／大阪大学名誉教授 (応用物理学)
藤 村 靖 米国オハイオ州立大学名誉教授 (音声言語学)

2006年度新規 (7名)

川 崎 恭 治 九州大学名誉教授 (物理学)
合 志 陽 一 前国立環境研究所理事長・筑波大学監事・東京大学名誉教授 (工業分析化学)
小 林 誠 高エネルギー加速器研究機構名誉教授 (素粒子理論)
中 野 三 敏 九州大学名誉教授 (日本文学)
星 元 紀 放送大学教授／東京工業大学名誉教授 (発生・生殖生物学)
宮 本 又 郎 関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授 (日本経済史・経済史)
William Shi-Yuan WANG (王 士元) 香港市大学工学部教授 (言語学)

4. 財務状況

(1) 資産運用

長期に亘る低金利状況の中で、「資産運用基準」に則って運用収入の確保に努めているところであるが、前年度に続き 2006 年度も基本財産及び運用財産のうち比較的高利回りの債券 2 件 2 億円が償還され、資産運用委員会に諮り、公債による再運用を行った。

この結果、2006 年度の運用収入は対予算額比約 860 万円の増額となったものの、対前年度決算額比では約 3,200 万円の減少となった。

また、このような収入減に対処するため、(2)に掲げる外部資金の導入に努めた。

(2) 外部資金

① 平成 18 年度科学研究費補助金（特定奨励費）

科学研究費補助金（特定奨励費）39,000 千円（前年度同額）が包括的研究テーマ「人類社会の調和的発展のための問題解決の統合システム創造にかかる基礎的研究」の下に実施される諸研究事業に文部科学省から交付され、研究プロジェクト等の実施に充当した。

② 平成 18 年度科学研究費補助金（基盤研究(B)）

科学研究費補助金基盤研究（B）として北川副所長を研究代表者とする「産学連携の知的財産法モデル」が採択され、2 年計画の第 2 年次として 7,200 千円（前年度 7,100 千円）が日本学術振興会から交付された。研究活動は、特別研究として実施した。

③ 財団法人山田科学振興財団 2006 年度研究援助

財団法人山田科学振興財団 2006 年度研究援助事業として、研究テーマ「計算機マテリアルデザインコピーマートの構築」（研究代表者：中西寛招へい研究者・大阪大学大学院工学研究科助手）に 2,500 千円の研究援助があった。対象期間は 2006 年 9 月から 2008 年 3 月 31 日までの 2 年間であり、研究活動は、特別研究として実施している。


(3) 収支状況

上記の(1)及び(2)に加え、当初予算より約 2,900 万円諸経費の削減に努めたものの、事業活動収入に比べ事業活動支出が約 5,200 万円超過することとなり、前期繰越金を当てるとともに、「研究事業推進基金」から 3,000 万円を取崩してこれに充当した。

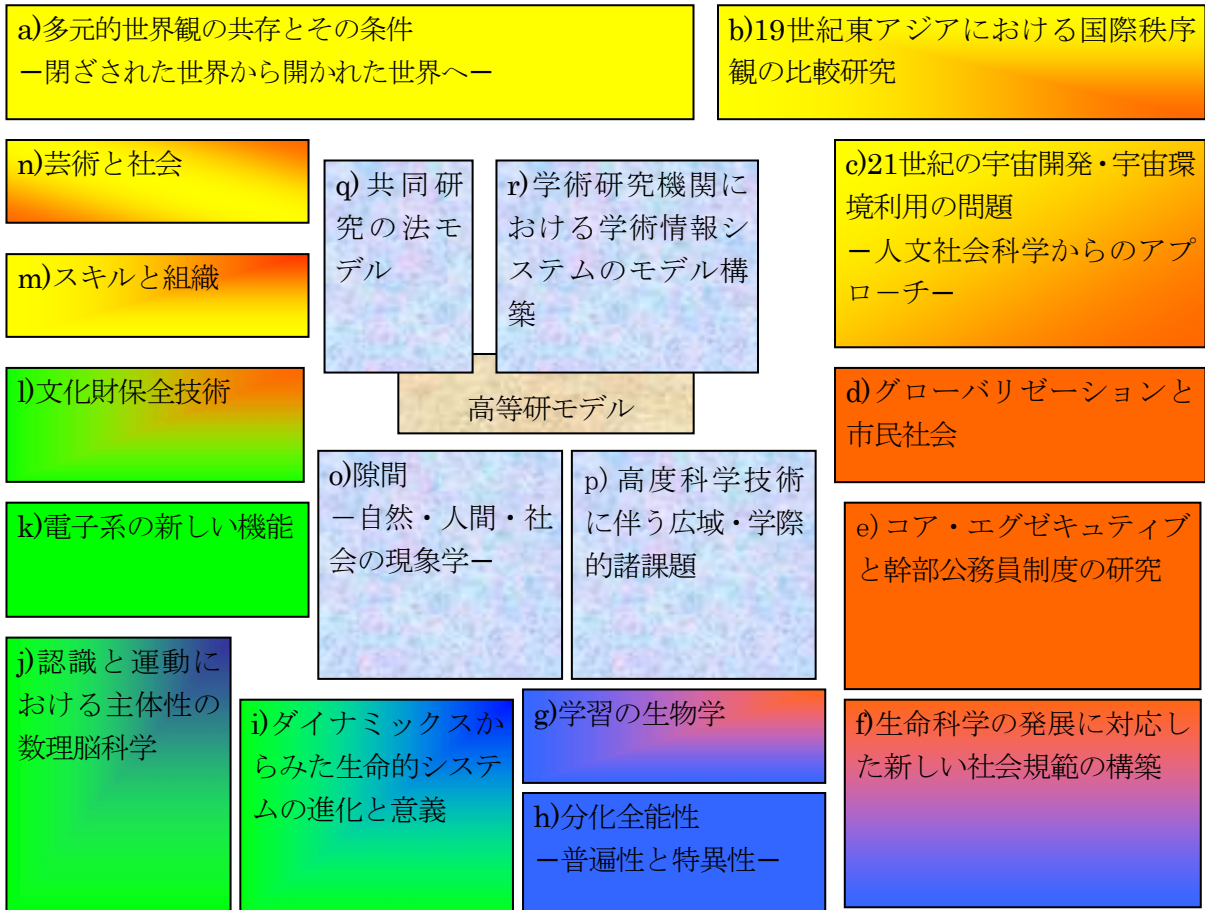
II 研究事業

1. 総括

本研究所は、諸研究機関の組織を横断した研究者集団を組織して、人類社会が科学・技術の急速な発展に伴って直面している様々な問題について、問題解決のための新しい概念に基づく統合システムを創造することを究極の目的とした研究事業を展開している。研究事業は、複数の研究者が参加するプロジェクトと個人研究者を対象にしたフェロー招へい事業に大別される。前者はさらに特定の主題を3年程度の期間継続的に研究する研究プロジェクト、フォーラム、公開講演会等の学術集会、学術の新分野での若手専門家養成を目指すスペシャリスト養成事業に分類されるが、これらは分類を超えて相互に関連し、研究プロジェクトをノードとするネットワークを形成する。本年度は、18研究プロジェクト、1学術フォーラム、4公開講演会と2分野についてのスペシャリスト養成事業を実施した。研究は、人文社会科学、理工学、生物科学の知が交錯する研究会を組織し、長時間の討論を通じて行われた。

個別事業の詳細は以下に述べるが、各研究プロジェクトを主題と研究対象に応じて配置した下図によって、その相互関連の概略を示す。図では、研究対象を人の心、社会、生命、人工物を含む自然と数理、総合主題と大別し、の5色によって表現している。2006年度は、前年度からの継続12課題（第4年次3課題、第3年次4課題、第2年次5課題）及び新規6課題についてプロジェクトを組織し、長時間の討論を主内容とする100回以上の研究会を行なった。各研究プロジェクトの課題名は、a)「多元的世界観の共存とその条件—閉ざされた世界から開かれた世界へ—」、b)「19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究」、c)「21世紀の宇宙開発・宇宙環境利用の問題—人文社会科学からのアプローチ—」、d)「グローバリゼーションと市民社会」、e)「コア・エグゼキュティブと幹部公務員制度の研究」、f)「生命科学の発展に対応した新しい社会規範の構築」、g)「学習の生物学」、h)「分化全能性—普遍性と特異性—」、i)「ダイナミックからみた生命的システムの進化と意義—構造と機能の固定化と変容に関する数理的観点—」、j)「認識と運動における主体性の数理脳科学」、k)「電子系の新しい機能」、l)「文化財保全技術」、m)「スキルと組織」、n)「芸術と社会—芸術表現における伝統と革新の問題—」、o)「隙間—自然・人間・社会の現象学—」、p)「高度科学技術に伴う広域・学際的諸課題」、q)「共同研究の法モデル」、r)「学術研究機関における学術情報システムのモデル構築」、である。

上記プロジェクトは、a)からe)までは異文化の交流と国際比較を軸とし、科学技術の発展を意識した人文社会学的研究であり、f)からj)に進むにつれて、生物科学から数理科学の色彩が強くなるが、社会規範、学習、人の心という研究対象を通じて人文社会学との連携を常に意識している。一部別途外部資金に基づくk)によって最新のナノ科学技術との連携を確保しながら、l)からn)で人の心と行動についての人文科学へ回帰する円環を形成するが、m)の研究はロボット工学の研究者が多数参加していることが象徴するように実際にはネットワーク的に関連し、場合によっては合同の研究会を開催している。総合主題関係の内o)「隙間—自然・人間・社会の現象学—」は、現代社会の提示する諸課題に対応できない諸科学の隙間の総合的研究であり、p)「高度科学技術に伴う広域・学際的諸課題」はプロジェクト形成を目指す作業グループを統括するもので、高度計測技術の発展と新規技術による既成技術の凋落の諸原因の探索、言語と生物の進化の総合的理解等を取り上げた。q)「共同研究の法モデル」は、「電子系の新しい機能」プロジェクトの前身である「物質科学とシステムデザイン」（2002年度—2004年度実施）での産学連携から生れた新しい法モデル（産学連携高等研モデル）の他の類似のプロジェクト（例：日本学振興会産学研究協力第177委員会等）への具体的応用と、さらに対象組織を一般化して「研究共同体」という概念で包括される大学その他の学術研究組織で、研究参加者相互の自由なコミュニケーションを確保するための新しい研究組織のあり方の研究へと発展している。この研究はr)「学術研究機関における学術情報システムのモデル構築」プロジェクトおよび別途科学研究費補助金基盤研究(B)によって実施した「産学連携の知的財産法モデル」プロジェクトと合わせて、21世紀における学術研究機関の研究基盤形成のための基礎研究と総括することができる。これらの研究が、図でその周囲に位置するバラエティに富む多角的学術研究と密接な関連のもとで実施されているところに他に類を見ない特色があり、ネットワークの有機的連携を実現させる中核と位置づけることができる。



2. 研究プロジェクト

2006年度は、下記のとおり継続11件（第4年次3件、第3年次4件、第2年次4件）及び新規5件の計16件の研究プロジェクトを実施した。

各研究プロジェクトの研究会開催状況、研究参加者の詳細は参考資料として添付。

(1) 共同研究の法モデル（2003～2006年度）

研究代表者：北川善太郎（副所長／京都大学名誉教授）

研究実績の概要：

本研究は、共同研究の諸類型における「共同研究の法モデル」の構築と、その法モデルの研究成果をコピーマーケット化する「共同研究コピーマーケット」の構築を大きな柱としてきた。

「共同研究の法モデル」分野では、特に研究共同体の第2層を明らかにするために、第一に「産学連携高等研モデル」の応用研究とともに、「学学」の共同研究を遂行した。共同研究の具体的な展開としては、「21世紀民法像」共同研究を継続し、日本民法アイデンティティの検討と中国との比較法的検討を行った。2007年2月には2005年度に引き続き「中国民法典立法高等研フォーラム」を開催し、中国民法典編纂における物権法の問題を討議した。第二に、研究代表者を中心に名城大学において遂行していた私立大学学術フロンティア推進事業「オンライン日本法コピーマーケット」の研究成果を受け止めて、民法および知的財産法を中心とした「法教育モデル」の可能性を検討した。

「共同研究コピーマーケット」分野では、特に研究共同体の第1層と第3層を明らかにするために、化学物質、電子顕微鏡写真、高等研学術出版、オンライン日本法のコピーマーケット構築に関わる法

的問題を研究した。特に高等研学術出版については、本プロジェクトの研究成果を基礎にして、コピーマート研究所が構築したコピーマート・システムに登録することになった。また、共同研究成果をコピーマート化から生じる法的問題やコピーマート全体像を考察するために、特別研究「産学連携の知的財産法モデル」と合同のコピーマート・フォーラムを4回開催し、そのうち1回は九州大学のプロジェクトと連携して、遺伝資源・伝統的知識の利益配分における諸問題を討議した。

2006年度は、研究会を18回、国際フォーラム1回、コピーマートフォーラム3回、日中民法典立法高等研フォーラム1回を開催した。

(2) 21世紀の宇宙開発・宇宙環境利用の問題—人文社会科学からのアプローチ—

(2003～2006年度)

研究代表者：木下 富雄（特別委員／京都大学名誉教授）

研究実績の概要：

本研究を実施していくために、研究チームを3つのサブチームに分けて行った。1つ目は宇宙への進出による人類の価値観の変化を研究するチーム、2つ目は宇宙における物理的・心理的環境の変化をもとに、月面基地の可能性と困難性を研究するチーム、そして3つ目は新しい宇宙法の制定と、宇宙のガバナンスの仕組みを研究するチームである。

第1のチームでは、宇宙に人類が進出することによって、これまで地球史の文脈で考えられていた人類史を宇宙史の中で書き換える必要があること、宇宙空間の物理的特性（ことに視覚系や重力系の情報の乏しさ）によって、これまで慣れてきた判断の基準系が失われ、結果として価値が地球上のそれよりも相対的になる可能性が高いこと、さらにこの価値の相対化は、宗教のあり方にも影響を与える可能性が高いこと、ことに絶対神の信仰に影響があることなどが指摘された。

第2のチームでは、無重力、宇宙放射線、真空、温度の激変といった物理的特性が、宇宙における居住性にどのような影響を与えるかについて検討され、その結果を基に恒常的な月面基地建設の困難性と可能性が議論された。そこで最重要の問題とされたのは水の確保と、月面基地と地球を結ぶ物流インフラの確保である。

第3のチームでは、これまでに作られた月条約や宇宙法が吟味され、その効用性と限界が指摘された。それを背景に、月面基地における居住者の行動を統制する法律、宇宙船、ロケット、スペースデブリなど、宇宙物体を統制する新しい法律を制定する可能性論じられた。またこれらの法律の背後にある重要な価値観は、国益や民族益ではなく、人類益である。これらのアイデアを実現するために、宇宙空間における先進国サミットの開催や、国連安全保障会議の開催が提言された。

以上の問題を広く社会に公開し多くの方たちと議論して貰うために、2006年12月に高等研究所に於いて、「宇宙問題への人文・社会科学からのアプローチ」と題するシンポジウムを開催した。

2006年度は、研究会を1回、シンポジウム1回を開催した。

(3) 分化全能性—普遍性と特異性 (2003～2006年度)

研究代表者：原田 宏（フェロー／特別委員／筑波大学名誉教授）

研究実績の概要：

本研究では、2003年度から本年度までの4年間で合計15回の研究会を開催した。研究会では、毎回、植物と動物の分野から最も先端的な研究を活発に行っている若手研究者を中心にゲストスピーカーを招き、話題提供の後、活発な討論を行った。我々の研究会が発足するまでは、動植物の分化全能性を研究している研究者の間では、この問題の重要性にもかかわらずほとんど情報の交換、交流がなかったが、この4年間の我々の活動により、両者間の意見交換が活発に行われる

ようになった。そして、分化全能性、特にその普遍性と特異性についての認識を大いに深めることができた。

特に 2006 年度は、最終年度としてシンポジウム「植物と動物における分化全能性—制御機構の普遍性と多様性—」を開催して、当該研究プロジェクトを総括するとともにその成果を外部に向けて発信することができた。

2006 年度は、研究会を 3 回、シンポジウム 1 回を開催した。

(4) 芸術と社会—芸術表現における伝統と革新の問題— (2004~2006 年度)

研究代表者: 佐々木正子 (企画委員/京都嵯峨芸術大学教授)

研究実績の概要:

我が国の文化芸術の中に見られる「伝統的表現」の調査を進めていくと、様々な分野において、いずれも「型」に行き着くことが多い。

それぞれの分野において、「型」はどのような役割を持ち、芸術的表現がどのように関わっているのかから考察を進めた。その結果「型」は合理的な理由から生み出されたものが多いこと、また、ある卓越した美的表現や良さものを他者が理解し再現する上の、重要な手掛かりと成り得ること等が明らかにされた。

型化における、学習、継承の面での有効性や、型化するために美意識や技術を芸術家自身かどのように分析し、把握しているのか、といった問題に関しては、「学習の生物学」や「スキルの科学」の研究者との意見交換を行った。

また、継承すべき「型」を学習修得し、更に熟成発展させた経歴を持つ人間国宝の方から直接お話しを伺うことで、芸術家自身の思考を追った。

「型」は、伝統としての定型のスタイルを継承するだけでなく、革新的表現を生み出す元ともなっていることに関しても考察を進めた。

2006 年度は、研究会 3 回 (内 1 回は「学習の生物学」との合同) を開催した。

(5) ダイナミクスからみた生命的システムの進化と意義

—構造と機能の固定化と変容に関する数理的観点— (2004~2006 年度)

研究代表者: 津田 一郎 (企画委員/北海道大学電子科学研究所教授)

研究実績の概要:

コアメンバーによる発表とゲストスピーカーによる講演を交えて、十分に討論を行なった。シンポジウムを一度開催した。遺伝子の無作為的変異と自然選択による進化に対して、ネオダーウィニズムの立場とそれとは異なる立場からの見解を幅広く議論した。特に genetic assimilation, heterochrony, heterotopy の可能性、鍵 DNA の変化によるシステムとしてのゲノムの再編成の可能性についての見解が深められた。さまざまなレベルで個と集団の問題があることもわかった。理論モデルについてもいくつか有望なものが現れた。細胞分化のモデルや遺伝子型、表現型の揺らぎ間の関係を与える数理モデルは実験との対応も良く深まった。タンパクの折りたたみ構造の数理モデルに関しては力学系モデルがそのダイナミクスの構造を明らかにしたが、実用レベルでの計算速度が不十分であり、実用上はいぜん平衡モデルが有利なようである。決着は計算機の性能向上に待つ以外にない。

2006 年度は、研究会 3 回を開催した。

(6) 隙間—自然・人間・社会の現象学— (2004~2006 年度)

研究代表者: 鳥海 光弘 (特別委員/東京大学大学院新領域創成科学研究科教授)

研究実績の概要:

隙間の現象学について統計物理学、プラズマ物理学、医科学、地球科学、発生学、脳科学、哲

学、社会学の分野から検討をおこない、数理科学的に取り扱うことが困難な課題について、人間科学的な方法で個人と個人との理解や規範、価値などのずれを理解することを自然科学的な課題にも適用するときには有効な実体把握であることが示された。そこで隙間を現象学的対象の3極、actuality, reality, model の間のすきまに分類した。それぞれ事象の個別性の総体、主体に依存した一般性、主体がつくる一般性である。これらの間の隙間が相互に干渉するときあらたな隙間が発生し、それが多様性の原因となることを示した。

2006年度は、コアメンバー研究会2回、ワークショップ1回を開催した。

(7) 学習の生物学 (2004～2006年度)

研究代表者: 星 元紀 (フェロー/企画委員/放送大学教授)

研究実績の概要:

本研究は、第一に、進化生物学や比較神経行動学等の視点から様々な生物系における学習過程。第二に、脳科学や発達認知神経科学の視点から、我々の脳における学習の生物学的機構に焦点を当てる。そのような理解のうえで、第三に、情報科学や情報工学を学習及び教育制度に応用が可能かどうか調査・研究する。最後に、これらを統合し、新たなより包括的な教育の概念が確立できないか、さらには生涯を通じたより良い学習及び教育のための制度の構築方法を見出せないか、検討することを目指した。

2006年度は、これまでの2年間で生物現象としての学習に一応の理解を得た成果に加えて、まず情報科学や情報工学の視点から学習・教育について検討した。次に、新たなより包括的な教育の概念を確立できないか、さらには生涯を通じたより良い学習及び教育のための制度の構築方法を見出せないか検討を進め、最終年度の総括を行った。

2006年度は、研究会5回を開催した。

(8) 多元的世界観の共存とその条件—閉ざされた世界から開かれた世界へ— (2005～2007年度)

研究代表者: 石川 文康 (特別委員/東北学院大学教養学部教授)

研究実績の概要

2006年度においては、正規メンバーと複数のゲストスピーカーによる発表が行われ、活発な議論が交わされた。それぞれの発表は、日独比較文化、ヨーロッパ哲学・思想のさまざまな思考法、ヘブライとギリシャとの関係、中国哲学におけるイスラムや仏教の影響、インド的寛容、ビザンチン社会構造、等に新たな光を当て、多元的世界観というテーマに大きく寄与するものであった。

2006年度は、研究会5回を開催した。

(9) 学術研究機関における学術情報システムのモデル構築 (2005～2007年度)

研究代表者: 北川善太郎 (副所長/京都大学名誉教授)

研究実績の概要:

学術情報システムは、研究過程の研究情報の公開、研究成果の出版、学術情報の適切な形での流通という、三つの仕組みからなる。これまで、NPO 法人コピーマート研究所と共同で、主に、研究過程の研究情報公開の場となる高等研ウェブサイトの構築を進めて暫定版としてアップロードするとともに、研究成果の発表媒体である高等研学術出版のコピーマート化を進めてきた。

2006年度には、学術情報の国際的な流通を可能にするオンライン著作権取引システム、WCC (ワールド・コピーマート・クラブ) の構築へ向けて、「共同研究の法モデル」研究、「産学連携の知的財産法モデル」研究と共同で、国外からの参加者を招き、コピーマート・フォーラムを行った。そして、高等研学術出版を、WCCに登録するとともに、高等研学術出版のあり方を示した「学術出版案内」を策定し、ビジネス・モデルとして完成させた。

また、高等研ウェブサイトについても、英語の整備に取り組み始めた他、濱清自然科学研究機

構生理学研究所名誉教授と共同で進めている電子顕微鏡写真のコピーマート化に向けた検討を行い、さらに、九州大学が所蔵する古文書の流通のためのシステム構築への取り組みを始めた。

2006年度は、研究会を16回、コピーマートフォーラム1回、打ち合わせ会1回を開催した。

なお、本年度はコピーマートの応用による高等学術情報システム構築の実験研究として、2005年度までに実施した4研究プロジェクト「スキルの科学」、「量子情報の数理」、「開発途上国と日本人長期政策アドバイザー」及び「センサー論」を取り上げ、研究の成果を公表するための作業を行い、コピーマート化の準備段階に至っている。

(10) コア・エグゼクティブと幹部公務員制度の研究 (2005～2006年度)

研究代表者:村松 岐夫 (フェロー・特別委員/京都大学名誉教授/学習院大学法学部教授)

研究実績の概要:

「執政中枢 (コア・エグゼクティブ)」の政治的性格を、官僚制あるいは公務員制度と関連づけて明らかにすることに目的として、まず公務員制度とその変革に関する資料の分析を行い、日本の政府中枢の政治的性格付けの先鞭を付けることを目指して検討した。関連して幹部候補生の任用 (政治的任用を含む) と人事評価制度をセットにして研究した。

2006年度は最終年度として、第一は、独、仏、日の公務員制度の比較の成果を論文に取りまとめた。第二には、1976年から始まり、3回行われた政策アクターサーベイのデータの統計的分析を基礎に、日本政治のコア・エグゼクティブの枠組みを利用しながら、戦後日本政治行政の変化を時系列的に分析する論文のとりまとめを行った。

2006年度は、研究会1回を開催した。

(11) 生命科学の発展に対応した新しい社会規範の構築 (2006～2008年度)

研究代表者:位田 隆一 (企画委員/京都大学大学院公共政策連携研究部教授)

研究実績の概要:

2006年度は、本プロジェクト全体についての構想を確認した。研究会においては、研究代表者が本企画の概要を説明した後、「生命科学の発展と倫理規範の対応—ゲノム・遺伝子解析と再生医療を素材にして—」と題する研究発表を行い、現在の2つの最先端の生命科学・医学研究分野の進展とそれに伴ってわが国でこれまで行われてきた倫理的議論及び指針等の状況の分析と、ポスト・シーケンス時代の新しいゲノム研究およびES細胞をより臨床に近づける人クローン胚研究について、社会とのかかわりの中で、人の生命の捉え方や価値、科学技術と社会の間のあるべきあり方などを含めていかなる問題が存在するかを検討した。また、参加研究者から「ユネスコ生命倫理と人権に関する世界宣言」の報告を受けて、同宣言の策定過程とそこにおける議論、規定の概要と問題点などを指摘した後、宣言のフォローアップとして今後取り上げるべき論点などを提示した。いずれの報告についても、活発な議論が行われた。

2006年度は、研究会1回を開催した。

(12) スキルと組織 (2006～2008年度)

研究代表者:榎木 哲夫 (特別委員/京都大学大学院工学研究科教授)

研究実績の概要:

第1回会合では、「スキルと組織」研究プロジェクトの概要について榎木代表より説明を行った。個人のスキルと組織のスキルのアナロジーについて、特に、環境との相互作用から認知が生じてくるという立場で現象を捕らえると、組織におけるスキルは、より行為主体的な側面が顕著になる。個人のスキルの集合体が、単なる和を超えて秩序・パターン形成するダイナミクス、例えば引き込み現象の分析などは、組織のスキルを考える上で大きなテーマの一つである。そのほか、ヒトを含む組織がもつ独特のダイナミズムやオープン・システムとしての組織の視点、組織

が行うセンスメイキング等の諸相に着目し、「実践知の普遍化と伝承」と「スキルと組織安全」の確立を目指していくとの趣旨説明を行った。各委員からは、自己紹介を兼ねて、本テーマへの関わり方についての表明がなされた。以降の会合では、①「セミオーシスとしての人間-環境系のデザイン」についての話題提供があり、生活環境を人間-環境系として捉え、そのセミオーシス（記号過程）のダイナミズムを解説・生成する新しいデザインの方法論の探求について報告された。美しい景観や快適な環境には、豊かな意味を創発するシステムが組み込まれていることが示された。②『組織横断協働問題解決にむかう上位上級・上級プロジェクトマネジャーのノウイング実践』についての発表があり、組織横断的に展開される協働問題解決を組織化する知の解明を目的として、実文脈との相互作用の中で生成されるノウイング行為に焦点をあて、業務系 IT システム開発を担当する上位上級・上級プロジェクトマネジャー（PM）を対象に、ケースメソッドにより、プロジェクト立上げ期とトラブル発生時の行為の比較についての報告があった。③『組織における情報システム開発と創発』に関する話題提供があり、ここでは、活動理論と主体の階層性の二つをベースに、個人と共同体の相互作用を通じて変化することを特徴とした集団的な知と個人的な行為を視覚化・総合化する方法論の試みについての報告を受けて、情報システムの開発・実施に伴う組織設計やビジネスプロセス・リエンジニアリングについて議論を行った。

2006 年度は、研究会 6 回を開催した。

(13) 認識と運動における主体性の数理脳科学（2006～2008 年度）

研究代表者：沢田 康次（フェロー・特別委員／東北大学名誉教授／東北工業大学副学長・工学部教授）

研究実績の概要：

脳の数理解的研究、脳型計算理論の研究はその先駆的な研究がはじまってからかなりの時間が経過した。この分野ではこれまでに個々の目覚しい成果があるが、神経細胞群のマイクロなダイナミクスと動物個体のマクロダイナミクスを結び付ける手法を開拓し、現代的な実験データを参考にして心の発現を数理的に理解できるフレームワークを構築する必要がある。

このため、本研究はこれまであまり明示的に行われてこなかった「脳機能としての認識と運動における主体性の解明」を研究課題として、その実証可能な数理解的研究の可能性を追及するものであること。

具体的には、①自己は数理的にいかにか表現できるか？②対等な自己の間のコミュニケーションは単純な自己からどのような修正を受けるか？を明らかにすることを目指したものであることの確認を行った後、2006 年度は、主に次のことに取り組んだ。

参加メンバーによる本テーマに関するこれまでの研究内容、紹介と討論を行った。特に本メンバーは、イメージング技術による実験研究者、認知心理学的手法による実験研究者、数理工学者、物理学者、哲学者で構成されていることから意見交換は興味深いものであった。また、研究会では、解明されていることの整理と、これから集中的に明らかにしていきたい問題にスポットを当てて論議を深めた。

2006 年度は、研究会 2 回を開催した。

(14) グローバリゼーションと市民社会（2006～2008 年度）

研究代表者：仁科 一彦（特別委員／大阪大学理事・副学長・大学院経済学研究科教授）

研究実績の概要：

いわゆるグローバリゼーションの進展によって、文化や人々の価値観をはじめとする社会生活のさまざまな側面が影響を受け、変貌することは否定できない。本プロジェクトは「グローバリゼーションと市民社会」のテーマのもとに、市民社会に生じると考えられる変化を、経済学、政治学、法学、歴史学の 4 研究領域からのアプローチを採用して研究する。

さらに、多様な事象を複数のアプローチから検討することが意味を持つためには、論理的な分析の方向性を示すことが必要である。はたしてグローバル・スタンダード(Global standard)と呼べるような制度や習慣は存在するのか、グローバリゼーションの一層の進展が世界をそのような方向に修練させるのか、それは望ましいと評価できるのか、等の議論を積み重ねて研究の方向を探っていく。

2006年度は、研究代表者他がプロジェクトに関する先行研究の調査を実施した。その一つは欧米の研究成果を整理し、次年度からの研究方向を探った。他には、イスラムの経済と文化について、重要な検討事項をまとめるための検討を行った。

2006年度は、研究会1回を開催した。

(15) 19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究(2006～2008年度)

研究代表者：吉田 忠(フェロー／東北大学名誉教授)

研究実績の概要：

研究会コアメンバーの共通理解と問題意識を共有するために、先行研究と新研究動向のレビューも兼ね、時代もやや遡ってテーマを定めた研究報告会を次のとおり開催した。

第1回は「新井白石の対外認識」と題し、5人が報告を行い、新井白石の国際秩序観についての集中的な討議を行った。白石にとって「中国」「朝鮮」が何を意味したか、正徳の通信使外交における国王復号を、単に対外的な問題としてではなく、対国内的な天皇と将軍との調整の問題としてとらえることの意義を論じ、また朝鮮燕行使との対比のなかで朝鮮通信使をとらえることにより、日本・朝鮮・中国の学術位相の差異が明らかとなり、加えて19世紀初頭まで国際秩序観に大きな影響を与えた白石『采覧異言』の知識源と蘭学者山村才助の増訂版との比較検討、「独立」などの用語の検討を行った。

第2回では「華夷秩序・華夷意識」をテーマに3人の報告と討論を行った。まず、幕末維新期において、日本の三国的世界観、天下観とともに華夷意識が転回し「政治帝国」が成立していく過程が考察され、また韓国における朝鮮中華主義の研究を批判的に検討し、燕行録の記事を通じて朝鮮中華主義の理念と現実を分析した。そして元旦朝賀儀礼を通して清朝の満蒙関係を考察し、そこで華夷秩序・意識とはほぼ無関係な世界観が存在したことが明らかになった。

第3回では、テーマを「東アジアにおける儒学・国学とその展開」として、「17世紀後半から18世紀前半の東アジアの学術交渉—荻生徂徠を中心に—」、「朝鮮における華夷秩序と欧米国際秩序の相克」、「東アジア近代と国学」について話題提供を受け、討議を行った。

第4回は、「アヘン戦争と『海国図志』」をテーマとして、「アヘン戦争情報の伝播とその影響—アヘン戦争情報からペリー来航へ—」、「江戸時代における『海国図志』について」、「中国近代思想史におけるアヘン戦争と『海国図志』—王朝と広東地域社会とのまなざし—」に関する話題提供に基づき討議を行った。

2006年度は、研究会4回を開催した。

(16) 高度科学技術に伴う広域・学際的諸課題

研究代表者：金森順次郎(所長／大阪大学名誉教授)

本研究は、現代社会を特徴付ける高度科学技術の発展過程で見出された萌芽段階にある広域的あるいは学際的な問題の全体像を明確化することを目的とする。

i. 作業グループ「女性研究者と科学の未来」(2005～2006年度)

研究代表者：伊藤 厚子(フェロー／お茶の水女子大学名誉教授)

本研究会においては、どのような環境があれば女性科学者が育つか、女性科学者が多数輩出する環境作りにはどのような努力が必要か、「科学する心」をもつ女性の層を厚くするにはど

のような努力が必要かなどを議論し、具体的な方策を提示することを目指し、検討した。

特に、科学技術分野で働く女性の比率が極めて少ない現状を打開する方策を検討する第一歩として、現状の把握を中心課題とした。その目的で、主として、男女共同参画推進に対する社会の動き（政策などを含む）についての講演・紹介を行うと共に、自然科学系学科出身の女性を対象に卒業後の進路についてアンケート/聞き取り調査を実施した（離職・転職者を含む）。

その結果から、重要と判断される次のような課題について抽出した。1. 科学技術指向の女性を増やす方策；a) 男性の感性・独創性、女性の感性・独創性（自然科学分野）、b) 女性と社会性、c) 女性とリーダーシップ、d) 意識改革、e) 社会通念（伝統）d) ロールモデルなど。2. 小中学校（幼少時）及び高等学校での理科教育、科学する心の涵養；a) 幼児期—社会と家庭の役割、b) 学校教育の役割、c) 成人教育（生涯学習）、c) 科学館、博物館、各種記念館、大学付置施設などの役割、d) 企業の役割、e) 地域の役割など。3. 男女共同参画での課題の中から；a) 数値目標、b) 評価のあり方、c) 任期制、d) 年齢制限、e) 離職・復職、f) 転勤、g) 勤務時間、h) 在宅勤務、i) ワークシェアリングなど。4. その他；ボランティアなど。

2006年度は、研究会2回を開催した。

ii. 作業グループ「進化と文法」（2005～2006年度）

研究代表者：藤村 靖 フェロー／オハイオ州立大学名誉教授

中島 泉 フェロー／中部大学生命環境科学研究所教授

文の階層的構成と高度に変化可能な音形は、抽象的な表現と具体的な発話現象の間の複雑だが規則的な対応の形式的対応関係を示す。その関係には生物の種に固有の性質を示すものがあると考えられ、言語の構造に見られる原理は、人間の遺伝コードの解釈にも必要となる可能性がある。これらを踏まえ、この研究では現在生物発生と言語発生の事例的研究と概念的な対比の段階にあるが、これまでの議論の成果をさらに深めて、遺伝情報の具体的な研究方法を提案するための検討を行った。

2006年度は、研究会2回を開催した。（内1回は国立情報学研究所において共同開催）

iii. 作業グループ「高度計測技術の発展と埋没」（2005～2006年度）

研究代表者：本河 光博 フェロー／東北大学名誉教授

2006年度は、微弱光検出器（高感度検出器）の問題を取りあげた。可視光領域、X線領域、THz領域において、わが国の検出器技術が国際的に見てどのレベルにあるのか、計測器としてビジネスになりえるのか、あるいはなぜなりえないのか、このようなことに関連し議論した。まとめると、フォトマルチプライヤーなどをはじめとして、この分野の日本の技術力は高く、世界をリードしているが、関連する企業が偏っている。CCDはカメラ業界ではいい技術を持っているがX線検出器となると外国製品を買わざるを得ない状況にある。欧米の大学付置研究所ではデバイスの開発や製品化まで行うところがあるが、我が国の大学や共同利用研は新しいデバイスのアイデアを出すことはできても、開発を完了し製品化するだけの力はない。主な理由として、我が国の大学等にはデバイス開発の専門技術スタッフがいらないことである。新デバイスに関する大学発のアイデアを埋没させないためには、専門スタッフを抱えた恒久的組織（機関）の設置が必要である。

2006年度は、研究会1回を開催した。

3. 特別研究

2006年度は、次の継続課題2件及び新規課題2件の計4件の特別研究を実施した。

(1) 電子系の新しい機能 (2005～2007年度)

研究代表者：新庄 輝也 (フェロー・上級研究員／京都大学名誉教授)

研究実績の概要：

本研究は、日本学術振興会研究開発専門委員会のメンバーに加え、同数程度の研究者（企業を含む）が参加し、現在進行している電子系の新しい機能に関する多くの研究を総合的に調査審議することを通じて、さらなる研究発展のための指針を得ようとするものであり、次世代エレクトロニクスの構築に向けて整備すべき研究基盤や、学術や開発研究の新しい方向性についての戦略提言を行うことを目指した。

本研究では、企業と学界、理論と実験、有機物と無機金属、マテリアルとシステムインテグレーションの垣根を越えて自由な討論を行う場を提供するものであり、総合的な検討を行うことに大きな意義がある。理論計算が主導する新奇な機能性物質の創製、システムインテグレーションを考慮した次世代エレクトロニクスへの応用を目標とする分子物性の研究、新奇物性を発現させる場としてのナノ構造制御、などを主要研究課題として取り上げ、密度の高い討論を通じて今後の展開の方向を探った。また、学界と産業界の若手研究者が交流する場を提供することにより、人材育成の見地から極めて有意義なものとなった。

2006年度は、研究会4回、特別研究会1回、幹事会4回を開催した。

(2) 産学連携の知的財産法モデル (2005～2006年度)

研究代表者：北川善太郎 (副所長／京都大学名誉教授)

研究実績の概要：

本研究の大きな特徴は、知的財産についての研究者の理解度に関する実証的調査である「知的財産理解度サーベイ」である。このサーベイを昨年度に計11回実施したが、今年度はサーベイの結果を分析し、法的な解説を付すとともに、受容度研究、すなわち、知的財産に関する法が研究者にどのように受容されているかという研究を進めた。その研究に基づき、知的財産を創作する者に知的財産問題の理解を促すために、どのような学習方法が効果的か、どのような法情報を提供する必要があるかということ整理した「問題学習」を作成した。産学連携に関する知的財産問題のうち、サーベイでは十分に検討することができなかった問題や「問題学習」作成過程においてさらに深く研究すべきと判断した問題については、「コピーマート・フォーラム」等のフォーラムを随時開催し、民法、比較法のみならず、理系の研究者の参加も得た。具体的なテーマは、遺伝資源・伝統的知識の問題、電子顕微鏡写真やアサガオ種子のコピーマート、所有と合意に関する民法の比較法的研究などである。

2006年度は、研究会25回、IP研究会1回、小研究会（打ち合わせ会を含む）3回、コピーマートフォーラム4回、JICA共催研究会3回、日中民法典立法高等研フォーラム1回を開催した。

(3) 文化財保全技術 (2006～2009年度)

研究代表者：志水 隆一 (フェロー・上級研究員／大阪大学名誉教授)

研究実績の概要：

本研究は、「過去」という時間を内在させた文化財が持つ「歴史・文化教育効果、異文化とのネットワーク効果、社会的遺伝子（文化や技術の伝承など）効果」に着目して、「文化財保全技術研究」を「文化財マネジメント」という全体の推進エンジンの中に位置づけ、新たな異分野ネットワークと新たな観点に立った保全技術の推進を基盤とするものがある。具体的には（1）ポータブルで比較的安価な高感度環境センシング技術の開発と、文化財周辺での実地検証による有用性の確

認を、そして(2)アジア諸国の文化財保全課題を把握する調査研究に絞り、中長期的に国際協力を積極的に関わっていくことを目的とするものであり、(1)は現在注目されている文化財の黴発生に焦点を当て、①黴・湿度センサー分科会、および②微粒子・微量ガスセンサー分科会を構成し検討、(2)では①アジア・中東の文化財保全技術に共通な課題抽出を行ない、今後の研究への布石を打つことを考慮するものである。このため、平成18年度は各々の今日的課題についての話題提供と討議を行った。

2006年度は、研究会4回を開催した。

(4) 計算機マテリアルデザインコピーマートの構築 (2006～2007年度)

研究代表者：中西 寛 (招へい研究者／大阪大学大学院工学研究科助手)

研究実績の概要：

近年計算手法の進歩と計算機能力の向上によって、ある範囲の物質については、理論的な性質を予言することが可能になり、有用な物質系の存在を予測し、後に実験によって確認される例が相次いでいる。このような研究現場で開発・蓄積された有用な計算コードを広く活用できるように、権利者の配布ポリシーに基づきながら、同時に幅広く利用されることを志向して、計算コードを流通させ得る学術情報システムを構築することを目指した研究を開始した。

2006年度は、研究会を1回開催した他、準備的な研究を進め、2007年度への展開を図った。

4. 覚書に基づく共同研究・協力研究等

○「京都大学国際イノベーション機構との共同研究に関する覚書」

2005年10月に京都大学国際イノベーション機構（機構長：松重和美教授）との間で締結した「共同研究に関する覚書」に基づき、コピーマートフォーラムを2007年3月14日に開催した。

5. フォローアップ研究

2005年度までに研究活動を終了した下記の3研究課題が、研究成果を総括するため、コアメンバーによる打合せを開催し、研究の成果報告書取りまとめの作業を行った。

なお、この研究活動は、課題研究「学術研究機関における学術情報システムのモデル構築」（研究代表者：北川善太郎副所長）において実践される出版コピーマートとして取り上げられた。

(1) スキルの科学（2003年度～2005年度実施）

研究成果を取りまとめの打合わせを5回開催し、研究成果の取りまとめを2007年3月に完了した。コピーマート化による報告書出版を2007年7月に予定している。

(2) 量子情報の数理（2003年度～2005年度実施）

研究成果を取りまとめの打合わせを2回開催し、研究成果の取りまとめを2007年3月に完了した。コピーマート化による報告書出版を2007年7月に予定している。

(3) 開発途上国と日本人長期アドバーザー（2003年度～2005年度実施）

研究成果を取りまとめの打合わせを4回開催し、研究成果の取りまとめを行い、コピーマート化の準備を進めている。報告書出版は2007年9月を予定している。

6. 学術フォーラム

○「細胞内共生－生物界における共生と支配－」

前年度に実施した「高度科学技術に伴う広域・学際的諸課題」作業グループ「ミトコンドリア再考－生物界における共生と支配－」（研究代表者：岡田益吉副所長、小林悟自然科学研究機構岡崎統合バイオサイエンスセンター教授）の研究参加者等が研究のレビューを目的として学術フォーラム「細胞内共生－生物界における共生と支配－」を12月9日に開催した。参加者16名。

7. 国際フォーラム

○「中国民法典立法高等研フォーラム」

研究プロジェクト「共同研究の法モデル」（研究代表者：北川善太郎副所長）の国際的事業として2005年8月に取りまとめた「中国民法典立法研究を中心に日中の法学交流を促進するための共同覚書」に基づき、「中国民法典立法高等研フォーラム」を2007年2月3日に開催した。

テーマは、「財産の合法性問題－中国物権法草案をめぐる論議と権利闘争－」。参加者33名。

Ⅲ. 「学者村」の活性化

1. 「フェロー (IIAS Fellow)」事業

「フェロー」は、小規模研究会の開催など自らの研究や他のフェローとの交流を行うとともに、企画委員会に出席して本研究所の研究活動への提言等を行った。

2006年度のフェローは、1. 管理運営—2. 企画委員会の項、「④2006年度フェロー」を参照。

2. 「招へい研究者 (IIAS Researcher)」の委嘱

各分野における中核的な研究者が高等研の良好な研究環境の中で自らの研究を推進し、他の研究者との交流を行うことを目的とする「招へい研究者 (「IIAS Researcher」)」として、2006年度は、下記の新規1名、継続2名の計3名の研究者に委嘱した。

山 田 篤	財団法人京都高度技術研究所情報メディア研究室長 委嘱期間：2005年12月1日から1年間。
中 西 寛	大阪大学大学院工学研究科助手 委嘱期間：2006年3月11日から1年間。
季 衛 東	神戸大学大学院法学研究科教授 委嘱期間：2006年6月9日から1年間。

Ⅳ. 専門的人材育成事業

1. コンピュータショナル・マテリアルズ・デザイン (CMD) ワークショップ

実行委員長：赤井 久純 (大阪大学大学院理学研究科教授)

事業の概要：

2002年度から大阪大学との共催事業として実施している本ワークショップは、下記のとおり2回開催した。

ワークショップでは、「マテリアルデザインの基礎と応用」、先端研究事例「半導体デバイス開発におけるコンピュータショナル・マテリアルズ・デザイン」等を課題に取り上げ、実習は日本原子力研究所光量子科学研究センターのスーパーコンピュータを利用して行われた。

①第9回ワークショップ：9月5日～9日

ビギナーコース39名、アドバンスドコース19名が参加

②第10回ワークショップ：2007年3月6日～10日

ビギナーコース33名、アドバンスドコース14名が参加

2. 特別研究員の採用

優秀な若手研究者の研究奨励を目的とする「特別研究員」は、2004年度に採用した2名を継続して採用した。両名は、北川副所長の指導の下に自らの研究を行うとともに、研究プロジェクト「共同研究の法モデル」、「学術研究機関における学術情報システムのモデル構築」及び特別研究「産学連携の知的財産法モデル」の研究活動に積極的に参加した。

松 井 章 浩 (資格：PD)

研究テーマ：国際法上の国家管轄権規則の限界としての主権免除規則の再検討

中 林 良 純 (資格：DC)

研究テーマ：法的強制概念の再検討

V. 学術情報事業

1. 情報出版事業の充実

これまで取り組んできた研究プロジェクト「共同研究の法モデル」及び特別研究「情報市場における近未来の法モデル」（未来開拓学術研究推進事業）の成果である『コピーマート』を用いた学術出版事業や大日本印刷㈱による電子書店「ウェブの書齋」の活用などの充実を図るとともに、研究プロジェクト「学術研究機関における学術情報システムモデル構築」の研究成果を取り込みながら、学術情報の整理・発信のためのシステム作りに取り組み、高等研モデルの実践に取り組んだ。

本研究所の研究活動を発信するため、研究成果報告書を自らが「出版者」として『コピーマート』を学術情報システムに応用した「学術出版」を行ってきた。

2006年度は、2のとおり、研究成果報告書3書をこのシステムを利用して出版した。

また、研究成果等の学術情報を発信するためのツールとして、高等研ホームページにおいて、『高等研学術出版』を開設し、広く公開している。本研究所に蓄積される様々な種類の学術情報がホームページを通じてより広く容易に提供できるよう、この学術情報システムの整備を引き続き、推進する。

2. 研究成果報告書の発行

2006年度は、過年度に実施した研究活動のうち、下記3書の研究成果報告書を出版した。これらの研究成果は、課題研究「学術研究機関における学術情報システムのモデル構築」（研究代表者北川副所長）の研究課題である『出版コピーマート』の実験研究として取り上げられたものである。

①高等研報告書 0325 「進歩主義の後継ぎはなにか」（増刷版）/173頁、2007年1月発行
（学術フォーラム「進歩主義の後継ぎはなにか」（研究代表者/廣田栄治、2003）

②高等研報告書 0601 「災害観の文明論的考察」/80頁、2007年1月発行
（課題研究「災害観の文明論的考察」（研究代表者/小堀鐸二、2001-2002）

③高等研報告書 0603 「途上国に対する経済政策アドバイザー体験記」360頁、2007年2月
（課題研究「開発途上国と日本人長期政策アドバイザー」（研究代表者/橋本日出男、2003-2005）

3. 選書の発行

2006年度は、岩倉具忠京都外国語大学教授の執筆による「岩倉具視における『国家』と『家族』～米欧巡回中『メモ帳』とそのごの家族の歴史～」を出版した。

VI. 一般公開事業

最前線の研究成果を公表する高等研公開講演会、恒例の茶会や施設見学会など下記4件を開催した。

1. 公開講演会

本研究所の研究プロジェクト参加者やフェロー等に、研究成果や最先端の研究活動についての発表の機会として、2006年度は下記の講演会を開催した。

(1) 京都銀行協賛・公開講演会

①テーマ：「燃料電池が開く社会と産業～エネルギー研究最前線と地球の未来～」

講師：吉田 博 大阪大学産業科学研究所教授

開催日：5月27日（土）

聴講者：82名

②テーマ：「西夏文字の世界」

講師：西田 龍雄 京都大学名誉教授／日本学士院会員

開催日：10月28日（土）

聴講者：110名

③テーマ：「植物の生存戦略～植物の生き方を探り、人間生活に活かす～」

講師：鎌田 博 筑波大学大学院生命環境科学研究科教授・同遺伝子実験センター長

開催日：2月24日（土）

聴講者：78名

(2) 京都大学文学研究科共催・公開講演会

共通テーマ「地図が語る声を聞く～あらたなる中国像と世界像を求めて～」

開催日：11月11日（土）

聴講者：70名

①テーマ：「多元のまなざしで描く中国歴史空間」

講師：李 孝聡 国際高等研究所フェロー・北京大学歴史学系教授

②テーマ：「世界史を変えたモンゴル時代—東西の地図が語る新地平—」

講師：杉山 正明 国際高等研究所企画委員／京都大学大学院文学研究科教授

2. 高等研「雅松庵」茶会

茶道裏千家及び榊福寿園のご協力を得て「茶会」を開催した。

開催日：5月13日（土）

参加者：228名

3. 施設見学会

隣接する(財)地球環境産業技術研究機構（RITE）及びオムロン(株)京阪奈イノベーションセンターの2機関と合同で施設見学会を初めて開催した。

開催日：5月17日（水）

参加者：450名

4. ゆめはんなサイエンスワークショップ

関西経済連合会が主催し、「私のしごと館」で開催された「ゆめはんなサイエンスワークショップ」に参加した。

開催日：4月29日（日）～30日（月）

参加者：約2,800名

VII. 広報活動

1. 「IIAS NEWSLETTER」等の発行

本研究所の活動計画や実施報告等を広報する機関紙「IIAS NEWSLETTER」について、研究活動を重点的に掲載するという編集方針の下に、定期的に発行した。

2006年度は、第47号～第52号の6編をそれぞれ3,000部発行・配布した。

一方、年2回程度発行してきた広報誌「こうとうけん」については、「IIAS NEWSLETTER」の充実に伴い、その編集内容や発行形態等の見直しの検討のため、発行を一時中断している。

2. ホームページの更新

研究プロジェクト「学術研究機関における学術情報システムのモデル構築」（研究代表者北川副所長）の研究テーマの1つとして学術研究機関の情報発信の事例として高等研のホームページを取り上げ、ホームページの構築と内容についての研究成果として、高等研ホームページの更新暫定版を立ち上げ、順次内容の更新とそのシステム構築を図っているところである。

参考資料

研究活動の実施状況

研究会等の開催状況	研究者氏名		備考
	研究代表者	研究参加者	
<p><研究プロジェクト></p> <p>①共同研究の法モデル</p> <p>開催状況 コピーマートフォーラム 2006年6月27日 2006年8月22日 (国際フォーラム) 2007年3月3日 2007年3月9日 日中民法典立法高等研フォーラム 2007年2月3日 第1回研究会 2006年8月26日 第2回研究会 2006年9月15日 第3回研究会 2006年10月6日 第4回研究会 2006年10月14日 第5回研究会 2006年10月27日 第6回研究会 2006年11月10日 第7回研究会 2006年11月17日 第8回研究会 2006年11月18日 第9回研究会 2006年12月1日 第10回研究会 2006年12月22日 第11回研究会 2007年1月12日 第12回研究会 2007年2月2日 第13回研究会 2007年2月9日 第14回研究会 2007年2月23日 第15回研究会 2007年3月2日 第16回研究会 2007年3月9日 第17回研究会 2007年3月16日 第18回研究会 2007年3月23日</p>	<p>北川善太郎 国際高等研究所副所長</p>	<p>(参加研究者 22名)</p> <p>岩瀬真央美 兵庫県立大学経済学部助教授 上田誠一郎 同志社大学法学部教授 上野 達弘 立教大学法学部助教授 金森順次郎 国際高等研究所長 季 衛東 国際高等研究所企画委員・招へい研究者 神戸大学大学院法学研究科教授 小口 彦太 早稲田大学法務研究科教授 潮見 佳男 京都大学大学院法学研究科教授 鈴木 賢 北海道大学大学院法学研究科教授 須永 知彦 滋賀大学経済学部講師 永田真二郎 関西大学大学院法学研究科教授 中林 良純 国際高等研究所特別研究員 松宮 広和 群馬大学社会情報学部助教授 松本 恒雄 一橋大学大学院法学研究科教授 マゾジュラル シュレスカ 甲南大学経営学部教授 宮脇 正晴 立命館大学法学部助教授 山田 篤 国際高等研究所招へい研究者 財団法人京都高度技術研究所研究開発部 情報メディアグループリーダー 山田 憲一 西南学院大学法学部助教授 山名 美加 大阪工業大学大学院知的財産研究科助教授 山本 敬三 京都大学大学院法学研究科教授 王 晨 大阪市立大学大学院法学研究科教授 高嶋 英弘 京都産業大学大学院法務研究科教授 平田 真己 大阪府立大学大学院経済学研究科大学院生 (研究支援者 1名) 松井 章浩 国際高等研究所特別研究員</p>	
<p>②21世紀の宇宙開発・宇宙環境利用の問題-人文社会科学からのアプローチ-</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年8月10日～11日 シンポジウム 2006年12月16日</p>	<p>木下 富雄 国際高等研究所フェロー・特別委員 京都大学名誉教授</p>	<p>(参加研究者 12名)</p> <p>青木 節子 慶應義塾大学総合政策学部教授 岡田 益吉 国際高等研究所副所長 ゴノン アンヌ 同志社大学言語文化教育研究センター教授 小林 道夫 京都大学大学院文学研究科教授 清水順一郎 宇宙航空研究開発機構筑波宇宙センター所長 城山 英明 東京大学大学院法学政治学研究科助教授 鈴木 一人 筑波大学大学院人文社会科学研究科助教授 谷 泰 京都大学名誉教授 中川 久定 国際高等研究所副所長 中谷 和弘 東京大学大学院法学政治学研究科教授 松本 紘 京都大学理事・副学長・名誉教授 的川 泰宣 宇宙航空研究開発機構執行役・教育センター長 宇宙科学研究本部教授・対外協力室長</p>	

<p>③分化全能性・普遍性と特異性・</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年7月8日 第2回研究会 2006年9月9日 第3回研究会 2007年2月3日 シンポジウム 2006年10月7日</p>	<p>原田 宏 国際高等研究所フェロー・特別委員 筑波大学名誉教授</p>	<p>(参加研究者 8名)</p> <p>岡田 益吉 国際高等研究所副所長 阿形 清和 京都大学大学院理学研究科教授 鎌田 博 筑波大学大学院生命環境科学研究科教授・遺伝子実験センター長 京 正晴 香川大学農学部教授 小林 悟 自然科学研究機構基礎生物学研究所 佐藤 文彦 岡崎統合バイオサイエンスセンター教授 高畑 公紀 京都大学大学院生命科学研究科教授 丹羽 仁史 京都大学大学院生命科学研究科研究員 理化学研究所発生・再生科学総合研究センター 多能性幹細胞研究チームリーダー</p> <p>(話題提供者 4名)</p> <p>梅田 正明 奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科教授 中村 輝 理化学研究所発生・再生科学総合研究センター生殖系列研究チームリーダー 長谷部光泰 自然科学研究機構基礎生物学研究所 岡崎統合バイオサイエンスセンター教授 山中 伸弥 京都大学再生医科学研究科教授</p>	
<p>④芸術と社会・芸術表現における伝統と革新の問題・</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年6月14日 第2回研究会 2006年11月25日 第3回研究会 2006年12月19日</p>	<p>佐々木正子 国際高等研究所 企画委員 京都嵯峨芸術大学 教授</p>	<p>(参加研究者 10名)</p> <p>岩田 一明 国際高等研究所フェロー 大阪大学名誉教授/神戸大学名誉教授 岡崎 貴子 (玉峰) 華道家・嵯峨御流華道芸術学院教授 荻阪 直行 京都大学大学院文学研究科教授 喜多村明里 兵庫教育大学大学院学校教育研究科助教授 金春 康之 能楽師・金春流シテ方 佐々木丞平 京都国立博物館長 佐野 玉緒 花方・慈照寺華務係 寺本 孝司 室蘭工業大学工学部助教授 藤村 靖 国際高等研究所フェロー オハイオ州立大名誉教授 横田八重美 財団法人今日庵文庫課長</p> <p>(話題提供者 2名)</p> <p>北村 昭斎 人間国宝・螺鈿工芸作家 鈴木 喜博 奈良国立博物館上席研究員</p> <p>(研究協力者 2名)</p> <p>栗辻 順恭 有限会社栗辻アートデレクション代表取締役 上林 紀子 京都外国語大学外国語学部非常勤講師</p>	
<p>⑤ダイナミクスからみた生命的システムの進化と意義</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年6月2日～3日 第2回研究会 2006年10月11日～12日 第3回研究会 2007年2月22日～23日</p>	<p>津田 一郎 国際高等研究所 企画委員 北海道大学電子科学研究科 教授</p>	<p>(参加研究者 26名)</p> <p>浅田 稔 大阪大学大学院工学研究科教授 池上 高志 東京大学大学院総合文化研究科助教授 伊藤 浩之 京都産業大学工学部情報通信工学科教授 金子 邦彦 東京大学大学院総合文化研究科教授 河本 英夫 東洋大学文学部哲学科教授 菊池 誠 大阪大学サイバーメディアセンター教授 小路田泰直 奈良女子大学文学部教授 櫻井 芳雄 京都大学大学院文学研究科教授 佐藤 哲 長野大学産業社会学部教授 佐藤 譲 北海道大学電子科学研究科助教授 下原 勝憲 同志社大学工学部教授 高木 由臣 奈良女子大学名誉教授 時田恵一郎 大阪大学サイバーメディアセンター 助教授 西尾章治郎 大阪大学大学院情報科学研究科長・教授 東 正剛 北海道大学大学院地球環境科学研究院教授 藤村 靖 国際高等研究所フェロー 米国オハイオ州立大学名誉教授 藤本 仰一 東京大学大学院総合文化研究科助手 安富 歩 東京大学大学院総合文化研究科助教授 四方 哲也 大阪大学大学院情報科学研究科助教授 伊藤 孝男 北海道大学大学院理学研究科大学院生 前田 真秀 北海道大学大学院理学研究科大学院生 松本 和宏 北海道大学大学院理学研究科大学院生 山口 裕 北海道大学大学院理学研究科大学院生 玉井 信也 北海道大学大学院理学研究科研究生 森本元太郎 東京大学大学院総合文化研究科特任研究員 深尾 葉子 大阪外国語大学外国語学部地域文化学科 助教授</p> <p>(話題提供者 7名)</p>	

<p>⑥隙間・自然・人間・社会の現象学-</p> <p>開催状況 コアメンバー研究会 第1回 2006年6月24日 第2回 2006年12月16日 ワークショップ 2006年8月17日～24日</p>	<p>鳥海 光弘 国際高等研究所 特別委員 東京大学大学院新領域 創成科学研究科教授</p>	<p>池原 健二 奈良女子大学理学部化学科教授 雨宮 隆 横浜国立大学大学院環境情報研究院 助教授 岡ノ谷一夫 独立行政法人理化学研究所 脳科学総合研究センター 生物言語研究チーム チームリーダー 鳥海 光弘 国際高等研究所特別委員 東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授 中村 桂子 JT生命誌研究館長 星 元紀 国際高等研究所フェロー・企画委員 放送大学教授／東京工業大学名誉教授 松島 俊也 北海道大学大学院理学研究院助教授</p> <p>(参加研究者 39名) * : コアメンバー *伊藤 伸泰 東京大学大学院工学系研究科助教授 *大坂 元久 日本医科大学老人病研究所助教授 *西森 拓 広島大学大学院理学研究科教授 *似田 貝香門 東京大学名誉教授 *松永 澄夫 東京大学大学院人文社会系研究科教授 *森反 章夫 東京経済大学現代法学部助教授 *吉田 善章 東京大学大学院新領域創成科学研究科教授 合原 一幸 東京大学生産技術研究所教授 合原 一究 京都大学大学院情報学研究科大学院生 秋山 高行 東京大学大学院工学系研究科大学院生 秋山 正和 広島大学大学院理学研究科大学院生 伊藤 純至 東京大学大学院工学系研究科大学院生 猪熊ひろか 東京大学大学院新領域創成科学研究科 大学院生 今村健一郎 東京大学大学院人文社会系研究科大学院生 上野 竜也 広島大学大学院理学研究科大学院生 大堀 研 東京大学社会科学研究所研究機関研究員 上村 淳 東京大学大学院工学系研究科大学院生 神谷 和也 東京大学大学院経済学研究科教授 越門 勝彦 東京大学大学院人文社会系研究科大学院生 小林 優子 東京大学大学院人文社会系研究科大学院生 斉藤 康則 東京大学大学院人文社会系研究科大学院生 佐藤 愛 東京大学大学院総合文化研究科大学院生 芝 隼人 東京大学大学院工学系研究科大学院生 島田 尚 東京大学大学院工学系研究科助手 白石 淳也 東京大学大学院新領域創成科学研究科 大学院生 鈴木 崇文 電気通信大学大学院電気通信学研究科 大学院生 鈴木 将 東京大学大学院工学系研究科大学院生 永野 惇 京都大学大学院理学研究科大学院生 沼澤 修平 東京大学大学院新領域創成科学研究科 大学院生 古川 勝 東京大学大学院新領域創成科学研究科 助教授 堀 暖 東京大学大学院新領域創成科学研究科 大学院生 本多 康生 東京大学大学院新領域創成科学研究科 大学院生 宮田 淳美 京都大学大学院理学研究科大学院生 村瀬 洋介 東京大学大学院工学系研究科大学院生 山口 裕之 徳島大学総合科学部人間社会学科助教授 湯川 諭 大阪大学大学院理学系研究科助教授 弓木 健嗣 広島大学大学院理学研究科大学院生 吉岡 直樹 東京大学大学院工学系研究科大学院生 Hans Georg Matuttis 電気通信大学知能機械工学科助教授</p>	
<p>⑦学習の生物学</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年6月14日 第2回研究会 2006年7月14日 第3回研究会</p>	<p>星 元紀 国際高等研究所フェロー・ 企画委員 放送大学教授</p>	<p>(参加研究者 15名) 岡田 益吉 国際高等研究所副所長 入來 篤史 理化学研究所脳科学総合研究センター 象徴概念発達研究チームリーダー 岡 浩太郎 慶應義塾大学理工学部教授 岡ノ谷一夫 理化学研究所脳科学総合研究センター 生物言語研究チームリーダー 荻阪 直行 京都大学大学院文学研究科教授</p>	

<p>2007年2月23日 第14回研究会 2007年3月2日 第15回研究会 2007年3月9日 第16回研究会 2007年3月23日</p> <p>⑩コア・エグゼクティブと 幹部公務員制度の研究</p> <p>開催状況 第1回研究会 2007年3月22日～23日</p>	<p>村松 岐夫 国際高等研究所フェロー・ 特別委員 京都大学名誉教授 学習院大学法学部教授</p>	<p>(参加研究者 5名)</p> <p>伊藤 光利 神戸大学大学院法学研究科教授 稲継 裕昭 大阪市立大学法学部教授 野中 尚人 学習院大学法学部政治学科教授 Krauss, Ellis Professor, University of California, San Diego Scheiner, Ethan Assistant Professor, University of California, Davi</p>	
<p>⑪生命科学の発展に対応した 新しい社会規範の構築</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年8月19日</p>	<p>位田 隆一 国際高等研究所 企画委員 京都大学大学院公共政 策連携研究部教授</p>	<p>(参加研究者 18名)</p> <p>浅井 篤 熊本大学大学院医学薬学研究部教授 江川 裕人 京都大学大学院医学研究科助教授 加藤 和人 京都大学人文科学研究所助教授 高嶋 英弘 京都産業大学大学院法務研究科教授 玉井真理子 信州大学医学部助教授 バゲリチメ・アリレザ 京都大学招へい外国人研究者 伏木 信次 京都府立医科大学大学院医学研究科教授 森崎 隆幸 国立循環器病センター研究所 バイオサイエンス部長 山内 正剛 独立行政法人放射線医学総合研究所 放射線防護研究センター 発達期被ばく影響研究グループ 前がん病変研究チームリーダー 岩江 荘介 大阪大学大学院医学系研究科大学院生 川上 雅弘 京都大学大学院生命科学研究科博士研究員 北川善太郎 国際高等研究所副所長 木南 敦 京都大学大学院法学研究科教授 木村 敦子 京都大学大学院法学研究科助手 小島 剛 京都大学大学院法学研究科COE研究員 藤岡 智子 財団法人比較法研究センター研究員 増井 徹 独立行政法人医薬基盤研究所主任研究員 松井 章浩 国際高等研究所特別研究員</p>	
<p>⑫スキルと組織</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年6月3日 第2回研究会 2006年7月29日 第3回研究会 2006年10月7日 第4回研究会 2006年12月16日 第5回研究会 2007年1月27日 第6回研究会 2007年3月17日</p>	<p>榎木 哲夫 国際高等研究所 特別委員 京都大学大学院工学研 究科教授</p>	<p>(参加研究者 16名)</p> <p>伊東 昌子 常磐大学人間科学部心理教育学科助教授 入來 篤史 独立行政法人理化学研究所 脳科学総合研究センター 象徴概念発達研究チームチームリーダー 岩田 一明 国際高等研究所フェロー 大阪大学・神戸大学名誉教授 小野里雅彦 北海道大学大学院情報科学研究科教授 北村 正晴 東北大学未来科学技術共同研究センター 客員教授 高谷 裕浩 大阪大学大学院工学研究科教授 寺本 孝司 室蘭工業大学工学部助教授 野村 幸正 関西大学文学部教授 林 勲 関西大学総合情報学部教授 堀口由貴男 京都大学大学院工学研究科助手 松嶋 隆二 神戸大学文学部教授・文学部長 門内 輝行 京都大学大学院工学研究科教授 飯田 康博 株式会社デンソー生産企画部 生産企画3室長 土屋総二郎 株式会社デンソー常務役員 中塚 信雄 オムロン株式会社 インダストリアルオートメーション ビジネスカンパニー技術総括センタ所長 掘田 正明 オムロン株式会社参与 (話題提供者 4名) 工藤 卓 独立行政法人産業技術総合研究所 セルエンジニアリング研究部門 ニューロニクス研究グループ研究員 小坂 武 東京理科大学経営学部教授 塩瀬 隆之 京都大学大学院情報学研究科助手</p>	

<p>⑬認識と運動における主体性の数理脳科学</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年8月9日～10日 第2回研究会 2007年3月23日～24日</p>	<p>沢田 康次 国際高等研究所フェロー・特別委員 東北大学名誉教授 東北工業大学副学長・工学部教授</p>	<p>八木 絵香 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任講師</p> <p>(参加研究者 14名)</p> <p>甘利 俊一 独立行政法人理化学研究所 脳科学研究センターセンター長</p> <p>池上 高志 東京大学大学院総合文化研究科助教授 乾 敏郎 京都大学大学院情報学研究所教授 大森 隆司 玉川大学学術研究所教授 岡田 真人 東京大学大学院新領域創成科学研究科教授 岡ノ谷一夫 独立行政法人理化学研究所 脳科学総合研究センター 生物言語研究チーム チームリーダー 金森順次郎 国際高等研究所長 津田 一郎 国際高等研究所企画委員 北海道大学電子科学研究所教授 野家 啓一 東北大学副学長・大学院文学研究科教授 藤村 靖 国際高等研究所フェロー オハイオ州立大学名誉教授 本田 学 国立精神・神経センター神経研究所 疾病研究第7部長 三崎 将也 情報通信研究機構未来ICT研究センター 特別研究員 宮内 哲 情報通信研究機構第一研究部門 研究マネージャー 星 元紀 国際高等研究所フェロー・企画委員 放送大学教授／東京工業大学名誉教授</p> <p>(話題提供者 1名) 信原 幸弘 東京大学大学院総合文化研究科助教授</p>	
<p>⑭グローバル化と市民社会</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年11月17日～18日</p>	<p>仁科 一彦 国際高等研究所 特別委員 大阪大学理事・副学長 大学院経済学研究科教授</p>	<p>(参加研究者 8名)</p> <p>猪木 武徳 国際日本文化研究センター教授 谷川 寧彦 早稲田大学商学部教授 北ノマケレビ 和歌山大学経済学部助教授 吉本 健一 大阪大学大学院高等司法研究科教授 川北 稔 国際高等研究所フェロー 京都産業大学客員教授 河田 潤一 大阪大学大学院法学研究科教授 小川 有美 立教大学法学部教授 杉原 薫 京都大学東南アジア研究所教授</p>	
<p>⑮19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年8月1日～2日 第2回研究会 2006年9月15日～16日 第3回研究会 2006年12月26日～27日 第4回研究会 2007年3月17日～18日</p>	<p>吉田 忠 国際高等研究所 フェロー・特別委員 東北大学名誉教授</p>	<p>(参加研究者 5名)</p> <p>姜 東局 名古屋大学法政国際教育協力研究センター 助教授 前田 勉 愛知教育大学教育学部教授 金 鳳珍 北九州市立大学外国語学部教授 中川 久定 国際高等研究所副所長</p> <p>(話題提供者 10名)</p> <p>夫馬 進 京都大学大学院文学研究科教授 ケイト・ワイルドマン・ナカイ 上智大学国際教養学部教授 大川 真 日本思想史学会会員 岡 洋樹 東北大学東北アジア研究センター教授 桐原 健真 東北大学大学院文学研究科助手 片岡 龍 東北大学大学院文学研究科助教授 石山 洋 元東海大学教授 岩下 哲典 明海大学ホスピタリティ・ツーリズム学部 教授 源 了圓 東北大学名誉教授、 茂木 敏夫 東京女子大学現代文化学部教授</p>	
<p>⑯高度科学技術に伴う広域・学際的諸問題</p> <p>i.作業グループ 「女性研究者と科学の未来」</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年10月14日 第2回研究会 2007年3月16日～17日</p>	<p>金森順次郎 国際高等研究所長</p> <p>伊藤 厚子 国際高等研究所フェロー お茶の水女子大学 名誉教授</p>	<p>(参加研究者 19名)</p> <p>足立 裕彦 国際高等研究所フェロー 京都大学名誉教授 岩村 道子 東邦大学理学部名誉教授 川崎 和子 奈良女子大学名誉教授 沢田 康次 国際高等研究所フェロー 東北工業大学副学長・工学部教授 東北大学名誉教授</p>	

		<p>重定南奈子 同志社大学文化情報学部教授 奈良女子大学名誉教授</p> <p>新庄 輝也 国際高等研究所上級研究員 京都大学名誉教授</p> <p>鳥養 映子 山梨大学大学院医学工学総合研究部教授 西川 恵子 千葉大学大学院自然科学研究科教授 野末 泰夫 大阪大学大学院理学研究科教授 藤村 靖 国際高等研究所フェロー 米国オハイオ州立大学名誉教授</p> <p>室伏きみ子 お茶の水女子大学理学部教授 望月 和子 大阪大学名誉教授／奈良女子大学理事 本河 光博 国際高等研究所フェロー 東北大学名誉教授</p> <p>J. C. Williams</p> <p>奥村 晶子 元奈良女子大学理学部化学科教授 野口 哲子 奈良女子大学理学部生物科学科教授 古屋 美和 独立行政法人科学技術振興機構 戦略的創造事業本部先端計測技術推進室 主査</p> <p>松尾 欣枝 奈良女子大学名誉教授 松岡 由貴 奈良女子大学理学部物理科学科助手</p> <p>(話題提供者 7名)</p> <p>今成 真 三菱化学株式会社顧問 JST産学連携事業本部開発主監</p> <p>岩淵 修一 奈良女子大学大学院人間文化研究科教授 大山 光晴 千葉県教育庁教育振興部指導課指導主事 小谷 利恵 文部科学省科学技術・学術政策局 基盤政策課専門官</p> <p>常盤 豊 文部科学省初等中等教育局教育課程課課長 富崎 松代 奈良女子大学理学部教授 藤枝 修子 お茶の水女子大学名誉教授・特任教授 若林 文高 国立科学博物館理工学研究部理工学研究室 主任研究官</p>	
<p>ii.作業グループ 「進化と文法」</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年8月1日～3日 第2回研究会 2006年12月27日～28日</p>	<p>藤村 靖 国際高等研究所フェロー オハイオ州立大学名誉 教授 中島 泉 国際高等研究所フェロー 中部大学生命健康科学 研究所教授</p>	<p>(参加研究者 12名)</p> <p>池原 健二 奈良女子大学理学部化学科教授 池上 高志 東京大学文理科学システム科学研究科 国際高等研究所フェロー／カリフォルニア大 学サンディエゴ校名誉教授 白井 浩子 岡山大学理学部臨海実験所助教授 原田なをみ 立教女学院短期大学英語科講師 原田かづ子 金城学院大学大学院文学研究科教授 福井 直樹 上智大学外国語学部教授 矢田 哲士 京都大学大学院情報学研究科助教授 EMONDS,Joseph 神戸松蔭女子学院大学教授 伊藤 敬 関西芸術学研究会代表 松井 知子 統計数理研究所モデリング研究系助教授 辻子美保子 神奈川外国語大学外国語学部助教授</p>	
<p>iii.作業グループ 「高度計測技術の発展 と埋没」</p> <p>開催状況 第1回研究会 2007年1月9日～10日</p>	<p>本河 光博 国際高等研究所フェロー 東北大学名誉教授</p>	<p>(参加研究者 10名)</p> <p>新庄 輝也 国際高等研究所上級研究員 京都大学名誉教授 今道 仙也 (株)島津製作所分析計測営業部課長 金森順次郎 国際高等研究所長 北川善太郎 国際高等研究所副所長 北澤 宏一 科学技術振興機構総括理事 小林 俊一 国際高等研究所フェロー 秋田県立大学長 沢田 康次 国際高等研究所フェロー 東北工業大学工学部教授 志水 隆一 国際高等研究所上級研究員 大阪大学名誉教授 外村 彰 理化学研究所フロンティア研究システム 単量子操作研究グループディレクター 大阪大学産業科学研究科教授</p> <p>吉田 博 (話題提供者 8名)</p> <p>相原 博昭 東京大学大学院理学研究科教授 雨宮 慶幸 東京大学大学院新領域創成研究科教授 鈴木 昌世 高輝度光科学研究センター研究調整部長 壽栄松宏仁 理化学研究所播磨研究所所長 常深 博 大阪大学大学院理学研究科教授</p>	

<p><特別研究></p> <p>①電子系の新しい機能</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年6月9日～10日 第2回研究会 2006年10月27日～28日 第3回研究会 2007年3月9日～10日 特別研究会 2007年1月13日 第1回幹事会 2006年5月15日 第2回幹事会 2006年10月16日 第3回幹事会 2006年12月22日 第4回幹事会 2007年2月17日</p>	<p>新庄 輝也 国際高等研究所 上級研究員 京都大学名誉教授</p>	<p>野口 卓 国立天文台先端技術センター助教授 萩行 正憲 大阪大学レーザーエネルギー学研究 センター教授 若槻 莊市 高エネルギー加速器研究機構物質構造科学 研究所教授 (研究協力者 14名) 秋光 純 青山学院大学理工学部物理・数理学科教授 井上 廉 徳島大学工学部電気電子工学科教授 川手 剛雄 元ジャパンスーパーコンダクタテクノロジー (株) (JASTEC) 木吉 司 (独) 物質・材料研究機構 (NIMS) 強磁場 研究センター副センター長 近藤 行人 日本電子株式会社 高柳 邦夫 東京工業大学大学院理工学研究科教授 田島 節子 大阪大学理学部理学研究科教授 田中 通義 東北大学・多元物質科学研究所顧問 林 征治 ジャパンスーパーコンダクタテクノロジー(株) (JASTEC) 山内 一夫 東京農工大学工学部生命工学科助手 山崎 俊夫 理化学研究所ゲノム科学総合研究センター タンパク質構造・機能研究グループチームリーダー 若林 健之 帝京大学理工学部バイオサイエンス学科教授 和田 仁 東京大学先端科学技術研究センター 渡辺 和雄 東北大学金属材料研究所</p> <p>(参加研究者 83名) * : 幹事 (日本学術振興会・高等研共通参加研究者 30名) <学界関係者> 石黒 武彦 同志社大学ヒューマンセキュリティ研究センター 専任フェロー/京都大学名誉教授 大野 英男 東北大学電気通信研究所 ナノ・スピニング実験施設長・教授 *小川 琢治 自然科学研究機構分子科学研究所教授 *小野 輝男 京都大学化学研究所教授 *金森順次郎 国際高等研究所長 金藤 敬一 九州工業大学大学院生命体工学研究科 教授 *齋藤 軍治 京都大学大学院理学研究科化学専攻教授 下田 達也 北陸先端科学技術大学院大学 ナノメテリアテクノロジーセンター教授 鈴木 義茂 大阪大学大学院基礎工学研究科教授 関 一彦 名古屋大学大学院理学研究科教授 寺倉 清之 北陸先端科学技術大学院大学 特別招聘教授 十倉 好紀 東京大学大学院工学系研究科教授 新田 淳作 東北大学大学院工学研究科教授 福山 秀敏 国際高等研究所企画委員 東京理科大学理学部教授 藤平 正道 東京工業大学大学院生命理工学研究科教授 *吉田 博 大阪大学産業科学研究所教授 <産業界関係者> 稲垣 由夫 富士写真フイルム株式会社 R&D統括本部有機合成化学研究所研究主幹 今本 浩史 オムロン株式会社先端デバイス研究所主査 長我部信行 株式会社日立製作所基礎研究所長 佐川 真人 インターメックス株式会社代表取締役 桜井 宏巳 旭硝子株式会社中央研究所主幹研究員 曾根 純一 日本電気株式会社基礎・環境研究所長 *高尾 正敏 松下電器産業株式会社中尾研究所参事 塚本 遵 東レ株式会社電子情報材料研究所 研究主幹・リサーチフェロー 堤 和彦 三菱電機株式会社先端技術総合研究所 映像技術部門統括 中村 志保 株式会社東芝研究開発センター 記憶材料・デバイスホトリー主幹研究員 林 茂樹 株式会社島津製作所 基盤技術研究所主幹研究員 林 仁志 株式会社アソシエ基礎研究所第六研究室長 *森田 雅夫 NTTアドバンステクノロジー株式会社</p>
---	---	---

		<p>横山 直樹 先端技術事業本部分析センタ所長 株式会社富士通研究所 ナノテクノロジー研究センター長</p> <p>(参加研究者 58名)</p> <p><学界関係者></p> <p>赤井 久純 大阪大学大学院理学研究科教授 秋永 広幸 産業技術総合研究所 ナノテクノロジー研究部門研究グループ 長</p> <p>東 正樹 京都大学化学研究所助教授 足立 裕彦 国際高等研究所フェロー 京都大学名誉教授</p> <p>阿波賀邦夫 名古屋大学物質科学国際研究センター教授 安藤 功兒 産業技術総合研究所 エレクトロニクス研究部門副部門長</p> <p>板谷 謹悟 東北大学大学院工学研究科教授 井上順一郎 名古屋大学大学院工学研究科教授 入江 正浩 九州大学大学院工学研究科教授 岩佐 義宏 東北大学金属材料研究所教授 臼杵 達哉 東京大学生産技術研究所 ナノエレクトロニクス連携研究センター特任教授 遠藤 康夫 国際高等研究所フェロー 東北大学名誉教授</p> <p>大森 裕 大阪大学先端科学イノベーションセンター教授 小川 一文 香川大学工学部教授 小口多美夫 広島大学大学院先端物質科学研究科教授 葛西 伸哉 京都大学化学研究所助手 川崎 雅司 東北大学金属材料研究所教授 北川 進 京都大学大学院工学研究科教授 北川善太郎 国際高等研究所副所長 腰原 伸也 東京工業大学 フロンティア創造共同研究センター教授</p> <p>小林 研介 京都大学化学研究所助教授 佐藤 和則 大阪大学産業科学研究所助手 島川 祐一 京都大学化学研究所教授 *志水 隆一 国際高等研究所上級研究員 大阪大学名誉教授</p> <p>白石 誠司 大阪大学大学院基礎工学研究科助教授 新海 征治 九州大学大学院工学研究科教授 高野 幹夫 京都大学化学研究所教授 高柳 英明 東京理科大学大学院理学研究科教授 寿田 博一 大阪大学大学院基礎工学研究科教授 多々良 源 首都大学東京都市教養学部准教授 田中 雅明 東京大学大学院工学系研究科教授 田畑 仁 東京大学大学院工学研究科教授 樽茶 清悟 東京大学大学院工学系研究科教授 中條 善樹 京都大学大学院工学研究科教授 塚越 一仁 独立行政法人理化学研究所前任研究員 永長 直人 東京大学大学院工学研究科教授 中村 貴義 北海道大学電子科学研究科教授 橋本 和仁 東京大学先端科学技術研究センター所長 春山 哲也 九州工業大学大学院生命体工学研究科教授 前川 禎通 東北大学金属材料研究所教授 松本 和彦 大阪大学産業科学研究所教授 三谷 忠興 北陸先端科学技術大学院大学 マテリアルサイエンス研究科教授</p> <p>壬生 攻 名古屋工業大学大学院工学研究科教授 宗片比呂夫 東京工業大学大学院理工学研究科教授 本河 光博 国際高等研究所フェロー 東北大学名誉教授</p> <p>森川 良忠 大阪大学産業科学研究所助教授 山口 茂弘 名古屋大学大学院理学研究科教授 渡部 行男 九州大学大学院理学研究科教授 坂田 雅文 東北大学大学院工学研究科研究員 福村 知昭 東北大学金属材料研究所講師</p> <p><産業界関係者></p> <p>足立 秀明 松下電器産業株式会社先端技術研究所 主幹研究員</p> <p>榎間 博 松下電器産業株式会社中尾研究所主幹技師 瀬恒謙太郎 松下電器産業株式会社 コーポレートR&D戦略室先端技術総括担当</p> <p>蔡 兆伸 日本電気株式会社基礎研究所主席研究員 松川 望 松下電器産業株式会社先端技術研究所</p>
--	--	---

<p>②産学連携の知的財産法モデル</p> <p>開催状況 コピーマートフォーラム 2006年6月27日 2006年8月22日 (国際フォーラム) 2007年3月3日 2007年3月14日 日中民法典立法高等研フォーラム 2007年2月3日 JICA共催研究会 2006年7月13日 2006年10月13日 2006年11月25日 IP研究会 2006年7月28日 打ち合わせ会 2006年5月13日 2006年6月9日 小研究会 2006年5月26日 第1回研究会 2006年6月30日 第2回研究会 2006年8月31日 第3回研究会 2006年9月15日 第4回研究会 2006年9月29日 第5回研究会 2006年10月6日 第6回研究会 2006年10月14日 第7回研究会 2006年10月27日 第8回研究会 2006年11月10日 第9回研究会 2006年11月17日 第10回研究会 2006年11月18日 第11回研究会 2006年12月1日 第12回研究会 2006年12月8日 第13回研究会 2006年12月15日 第14回研究会</p>	<p>北川善太郎 国際高等研究所副所長</p>	<p>主任研究員 山口 浩司 NIT物性科学基礎研究所 量子電子物性研究部部長 濱田 智之 株式会社日立製作所基礎研究所 ナノ材料ラボ 主任研究員 白沢 信彦 東レ株式会社電子情報材料研究所研究員 (話題提供者 11名) 安達千波矢 九州大学未来化学創造センター教授 阿部 真之 大阪大学大学院工学系研究科助教授 大越 慎一 東京大学大学院理学系研究科教授 大谷 義近 東京大学物性研究所 ナノスケール物性研究部門教授 大森 賢治 自然科学研究機構分子科学研究所教授 黒田 眞司 筑波大学大学院数理物質科学研究科助教授 染谷 隆夫 東京大学工学系量子相電ロクス研究センター 工学部物理工学科助教授 高塚 和夫 東京大学大学院総合文化研究科教授 田中 一義 京都大学大学院工学研究科教授 長谷川 剛 物質・材料研究機構ナノマテリアル研究所 原子電ロクスグループ アソシエイト イレクター 株式会社東芝研究開発センター 研究主幹</p> <p>(参加研究者 16名) 上野 達弘 立教大学法学部助教授 金森順次郎 国際高等研究所長 勝久 晴夫 コピーマート研究所研究員 マノジ L シュルカ 甲南大学経営学部教授 新庄 輝也 国際高等研究所上級研究員 京都大学名誉教授 高田 恭子 知的財産研究所特別研究員 津田 一郎 北海道大学電子科学研究所教授 中林 良純 国際高等研究所特別研究員 深見 克哉 九州大学知的財産本部産学連携コーディネーター 藤岡 智子 比較法研究センター調査研究員 松井 章浩 国際高等研究所特別研究員 松宮 広和 群馬大学社会情報学部講師 三浦 武範 コピーマート研究所研究員 宮脇 正靖 立命館大学法学部助教授 本河 光博 国際高等研究所フェロー 東北大学名誉教授 山田 篤 国際高等研究所招へい研究者 京都高度技術研究所情報メディア室長 山名 美加 大阪工業大学知的財産学部助教授 季 衛東 神戸大学大学院法学研究科教授</p>	
--	-----------------------------	--	--

<p>2006年12月22日 第15回研究会 2007年1月12日 第16回研究会 2007年1月25日 第17回研究会 2007年2月2日 第18回研究会 2007年2月9日 第19回研究会 2007年2月23日 第20回研究会 2007年3月2日 第21回研究会 2007年3月3日 第22回研究会 2007年3月9日 第23回研究会 2007年3月16日 第24回研究会 2007年3月23日 第25回研究会 2007年3月30日</p> <p>③文化財保全技術</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年5月24日 第2回研究会 2006年9月1日 第3回研究会 2006年11月9日 第4回研究会 2007年1月12日</p>	<p>志水 隆一 国際高等研究所 上級研究員 大阪大学名誉教授</p>	<p>(参加研究者 56名)</p> <p>足立 裕彦 国際高等研究所フェロー 京都大学名誉教授</p> <p>石澤 良昭 上智大学長 アジア人材養成研究センター所長</p> <p>岩崎 好規 財団法人地域地盤環境研究所常務理事</p> <p>上野 邦一 奈良女子大学生活環境学部長・教授</p> <p>上原 正行 日本建築協会理事</p> <p>遠藤 宣雄 上智大学アジア人材養成研究センター研究員</p> <p>小野 元之 日本学術振興会理事</p> <p>片桐 正夫 日本大学理工学部建築学科教授</p> <p>金森順次郎 国際高等研究所長</p> <p>木内 正人 独立行政法人産業技術総合研究所 産学官連携推進部門関西産学官連携センター 生活環境技術連携研究体長</p> <p>北田 正弘 東京芸術大学大学院美術研究科教授</p> <p>合志 陽一 国際高等研究所フェロー 東京大学名誉教授・筑波大学監事</p> <p>後藤 敬典 独立行政法人産業技術総合研究所 中部センター客員研究員</p> <p>小林 俊一 秋田県立大学長</p> <p>齋藤 孝正 文化庁文化財部美術学芸課 主任文化財調査官・文化財管理指導官</p> <p>佐藤 壮郎 人事院顧問</p> <p>佐野 千絵 文化財研究所東京文化財研究所 保存科学部生物科学研究室室長</p> <p>重枝 豊 日本大学理工学部建築学科助教授</p> <p>鈴木 孝仁 奈良女子大学理学部生物学科教授</p> <p>竹内 孝江 奈良女子大学理学部化学科助教授</p> <p>田中 健治 名古屋大学名誉教授 独立行政法人製品評価技術基盤機構 バイオテクノロジー本部顧問</p> <p>谷本 親伯 大阪大学大学院工学研究科教授</p> <p>寺田 靖子 財団法人高輝度光科学研究センター 利用研究促進部門主幹研究員</p> <p>中桐 昭 独立行政法人製品評価技術基盤機構 バイオテクノロジー本部生物遺伝資源部 遺伝資源保存課研究職員</p> <p>西山 要一 奈良大学文学部文化財学科教授</p> <p>二瓶 好正 東京理科大学総合研究機構長</p> <p>濱田 信夫 大阪市立環境科学研究所大気環境課研究主任</p> <p>増子 昇 東京大学名誉教授</p> <p>松谷 貴臣 大阪電気通信大学情報通信工学部 光・エレクトロニクス科学術研究員</p> <p>丸勢 進 独立行政法人科学技術振興機構 活用プラザ東海総館長</p> <p>三浦 定俊 文化財研究所東京文化財研究所 副所長・企画情報部長</p>	
---	---	--	--

<p>④計算機マテリアルデザイン コピーマートの構築</p> <p>開催状況 研究会 2006年8月2日</p> <p><フォローアップ研究></p> <p>①スキルの科学</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年5月20日 第2回研究会 2006年9月9日 第3回研究会 2006年11月18日 第4回研究会 2006年12月16日 第5回研究会 2007年3月10日</p> <p>②量子情報の数理</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年11月25日 第2回研究会 2007年2月24日</p>	<p>中西 寛 国際高等研究所 招へい研究者 大阪大学大学院工学研 究科助手</p> <p>岩田 一明 国際高等研究所フェロ 大阪大学名誉教授 神戸大学名誉教授</p> <p>大矢 雅則 東京理科大学理工学部 教授</p>	<p>村上 隆 文化財研究所奈良文化財研究所 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区） 上席研究員</p> <p>村田 朋美 北九州市立大学国際環境工学部 環境工学研究科・環境空間デザイン学科教授</p> <p>冷泉 為人 財団法人冷泉時雨亭文庫理事長</p> <p>吉田 忠 国際高等研究所フェロー・特別委員 東北大学名誉教授</p> <p>岩口 伸一 奈良女子大学理学部生物科学科助教授</p> <p>木曾 功 日本学術振興会理事</p> <p>石田 英之 株式会社東レリサーチセンター代表取締役 副社長</p> <p>大久保 衛 株式会社ソダ工業開発室主任技師</p> <p>太田 秀和 株式会社環境総合テクノス計測分析所所長</p> <p>大堀 謙一 株式会社堀場製作所 半導体・科学システム統括部統括部長</p> <p>小柳 大吾 新日本電工株式会社代表取締役</p> <p>小山 潤 株式会社半導体エネルギー研究所取締役</p> <p>曾田 勇作 株式会社ソダ工業代表取締役</p> <p>高尾 正敏 松下電器産業株式会社中尾研究所参事</p> <p>橋本 良夫 新日本電工株式会社技術部長</p> <p>福島 繁 株式会社島津製作所 海外研究拠点支援センター課長</p> <p>堀場 厚 株式会社堀場製作所代表取締役社長</p> <p>松尾 治 松尾捺染株式会社代表取締役</p> <p>山崎 舜平 株式会社半導体エネルギー研究所 代表取締役社長</p> <p>山下 収 オムロン株式会社専務取締役</p> <p>吉田多見男 株式会社島津製作所取締役技術研究担当</p> <p>西岡 寿 株式会社環境総合テクノス計測分析所リター</p> <p>西山 要輔 株式会社ソダ工業取締役</p> <p>平野 章弘 株式会社堀場製作所科学システム統括部 チームリーダー</p> <p>吉田 佳一 株式会社島津製作所基礎技術研究所長 (話題提供者 1名)</p> <p>村上 隆 文化財研究所奈良文化財研究所 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区） 上席研究員</p> <p>(参加研究者 4名)</p> <p>小倉 昌子 大阪大学大学院理学研究科助手</p> <p>佐藤 和則 大阪大学産業科学研究所助手</p> <p>松井 章浩 国際高等研究所特別研究員</p> <p>山田 篤 国際高等研究所招へい研究者 京都高度技術研究所情報メディア室長</p> <p>(参加研究者 11名)</p> <p>*：幹事</p> <p>*小野里雅彦 北海道大学大学院情報科学研究科教授</p> <p>*榎木 哲夫 京都大学大学院工学研究科教授</p> <p>*高谷 裕浩 大阪大学大学院工学研究科教授</p> <p>*谷水 義隆 大阪府立大学大学院工学研究科講師</p> <p>*寺本 孝司 室蘭工業大学工学部助教授</p> <p>*野村 幸正 関西大学文学部教授</p> <p>*橋詰 謙 大阪大学大学院医学系研究科助教授</p> <p>入來 篤史 理化学研究所脳科学総合研究センター 象徴概念発達研究チームリーダー</p> <p>馬野 元秀 大阪府立大学大学院理学系研究科教授</p> <p>松尾 知之 大阪大学大学院医学系研究科講師</p> <p>吉川 恒夫 立命館大学情報理工学部教授</p> <p>(参加研究者 21名)</p> <p>*：幹事</p> <p>*小嶋 泉 京都大学数理解析研究所助教授</p> <p>*尾畑 伸明 東北大学大学院情報科学研究科教授</p> <p>*飛田 武幸 名城大学理工学部特任教授</p> <p>荒木不二洋 京都大学名誉教授</p> <p>入山 聖史 東京理科大学理工学部助手</p> <p>久保 泉 広島工業大学環境学部教授</p> <p>斉藤 公明 名城大学理工学部教授</p>
--	---	--

<p>③開発途上国と日本人長期政策アドバイザー</p> <p>開催状況 第1回研究会 2006年6月24日 第2回研究会 2006年9月30日 第3回研究会 2007年1月13日 第4回研究会 2007年3月3日</p>	<p>橋本日出男 国際高等研究所フェロー 大阪大学理事</p>	<p>佐藤 圭子 東京理科大学工学部講師 田崎 秀一 早稲田大学理工学術院教授 Si Si 愛知県立大学情報科学部助教授 清水 哲二 名城大学工学部研究員 高田 俊和 日本電気(株)・基礎・環境研究所主席研究員 田 倍之 愛知工業大学経営情報科学部教授 松岡 隆志 諏訪東京理科大学経営情報学部助教授 宮崎 智 東京理科大学薬学部教授 渡邊 昇 東京理科大学工学部教授 宮下 真行 東京理科大学大学院理工学研究科大学院生 山本 達郎 東京理科大学大学院理工学研究科大学院生 Accardi, Luigi イタリア第2大学教授 Fichtner, Karl・Heinz Friedrich-Schiller-Universität Jena大学教授 Volovich, Igor ロシアSteklow数学研究所教授</p> <p>(研究参加者 12名)</p> <p>上野 宏 南山大学総合政策学部教授 梅溪 昇 大阪大学名誉教授 菊池 剛 (株)日本開発サービス主任研究員 下田 道敬 国際協力機構国際協力総合研修所 国際協力専門員 田中 哲二 (株)東芝常勤顧問 中川 久定 国際高等研究所副所長 原田 宏 国際高等研究所フェロー・特別委員 筑波大学名誉教授 舟橋 學 中小企業振興専門家 松井 和久 日本貿易振興機構アジア経済研究所 専任調査役 森 裕之 国際協力機構ヨルダン事務所次長 山田 泰造 国際協力機構国際協力総合研修所 国際協力専門員 和田 正武 帝京大学経済学部教授</p>	
<p>④センサー論</p> <p><学術フォーラム></p>	<p>鷺田 清一 大阪大学理事・副学長</p>	<p>(研究参加者 9名)</p> <p>浅田 稔 大阪大学大学院工学研究科 知能・機能創製工学教授 小浦 久子 大阪大学大学院工学研究科助教授 佐々木正人 東京大学大学院 情報学環境教育学研究科教授 高安真里子 マリ子ダンスシアター主宰 中野 善浩 (株)ヒューマンルネッサンス研究所主任研究員 橋本 毅彦 東京大学大学院先端科学技術研究センター 教授 松村 澄子 山口大学理学部自然情報科学科助教授 村田 純一 東京大学大学院総合文化研究科教授 山極 寿一 京都大学大学院理学研究科</p>	
<p>○細胞内共生－生物界における共生と支配－</p> <p>開催状況 フォーラム 2006年12月9日</p>	<p>岡田 益吉 国際高等研究所副所長 小林 悟 自然科学研究機構基礎 生物学研究所岡崎統合 バイオサイエンスセン ター教授</p>	<p>(参加者 14名)</p> <p>井上 勲 筑波大学大学院生命環境科学研究科教授 重信 秀治 自然科学研究機構基礎生物学研究所 岡崎統合バイオサイエンスセンター助手 林 純一 筑波大学大学院生命環境科学研究科教授 深津 武馬 産業技術総合研究所生物機能工学研究部門 生物共生相互作用研究グループ長 前澤 孝信 総合研究大学院大学大学院生 南澤 究 東北大学大学院生命科学研究科教授 四方 哲也 大阪大学大学院情報科学研究科教授 井上 信一 筑波大学大学院生命環境科学研究科大学院生 古賀 隆一 産業技術総合研究所生物機能工学研究部門 生物共生相互作用研究グループ研究員 土田 努 産業技術総合研究所生物機能工学研究部門 生物共生相互作用研究グループ研究員 徳田 誠 産業技術総合研究所生物機能工学研究部門 生物共生相互作用研究グループ研究員 橋山 一哉 総合研究大学院大学大学院生 細川 貴弘 産業技術総合研究所生物機能工学研究部門 生物共生相互作用研究グループ研究員 安佛 尚志 産業技術総合研究所生物機能工学研究部門 生物共生相互作用研究グループ研究員</p>	